



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	日本語を母語とする特異的言語発達障害児の言語特徴(論文全文)
Author(s)	村尾, 愛美
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/145677
Publisher	
Rights	

日本語を母語とする特異的言語発達障害児の言語特徴

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
(東京学芸大学)

学校教育学専攻 発達支援講座

R13-3003 村尾 愛美

目次

第1章 序論.....	1
第1節 本研究の背景.....	2
第2節 欧米の SLI 研究.....	5
第3節 我が国の SLI 研究.....	11
第4節 本論文の目的及び構成.....	15
第2章 SLI 児 2 例を対象とした縦断研究.....	17
第1節 自然発話における誤用の全体的な特徴.....	18
第2節 自然発話における格助詞の誤用.....	30
第1項 格助詞の誤用の特徴.....	30
第2項 格助詞の誤用の持続性.....	38
第3節 自然発話における時制・アスペクト・受動文の誤用.....	41
第1項 時制の誤用の特徴と持続性.....	41
第2項 アスペクトの誤用の特徴と持続性.....	47
第3項 受動文の誤用の特徴と持続性.....	53
第3章 SLI 児多数例を対象とした横断研究.....	59
第1節 実験課題と自然発話における格助詞の誤用の比較.....	60
第2節 実験課題における格助詞の誤用に及ぼす語順、態の影響.....	70
第4章 総合考察.....	75
第1節 日本語を母語とする SLI 児の言語特徴.....	76
第2節 日本語を母語とする SLI 児の言語特徴の臨床的意義.....	82

第3節 縦断研究で対象とした2例の言語特徴の比較	83
文献	86

第 1 章

序 論

第1節 本研究の背景

特異的言語発達障害 (specific language impairment: 以下 SLI) の子どもとは、聴覚障害、非言語性知能の低さ、神経学的異常などの要因が明らかでないにもかかわらず、言語能力 (language ability) に著しい制約を示す子どもをいう (Leonard, 1998)。

SLI に関する研究は約 200 年前から行われているものの、用語の変遷によってその事実は曖昧になっている。1980 年代まではこのような症状に対して、“congenital aphasia”、“developmental aphasia”、“developmental dysphasia” などが使用されてきた。1980 年代の初頭から “specific language impairment” が使用され始めるようになり、現在では、この “specific language impairment” が最も広く用いられている用語である (Leonard, 2014)。なお、この症状に対して別の用語も用いられている。*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (5th ed.) (DSM-5) (American Psychiatric Association, 2013) においては、“language disorder” という用語が使用され、“social communication disorder” や “speech disorder” と区別されている。また、*International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems* (10th ed.) (ICD-10) (World Health Organization, 2005) では、“expressive language disorder” や “receptive language disorder” という用語が使用されており、いずれにおいても SLI というカテゴリーは設けられていない。

SLI の同定は、非言語性知能の低さ、聴覚障害、神経学的異常など、明らかな言語発達を阻害する要因がないという除外基準と、言語に限ってその正常な発達が妨げられているという包含基準に基づいて行われる。しかし、除外基準が比較的明確であるのに対し、包含基準については研究者間で一致したものはない。言語面に問題を示す基準として、標準化された言語検査の得点が -1.25 標準偏差以下であることなどが示されてきたが、近年、検査の得点のみから判断することには問題があるとする指摘もある (Leonard, 2014)。

SLI はいくつかのサブタイプに分類される可能性が指摘されているが、最も典型的な SLI 児は文法発達の一側面、特に屈折形態論に問題を示すといわれてきた。英語を対象とした調査においては、幼児期に 7.4% の割合で SLI 児が存在し、女兒 6%、男児 8% の割合であ

ったと報告されている (Tomblin, Records, Buckwalter, Zhang, Smith & O'Brien, 1997)。

SLI の原因はまだ解明されていないが、MRI や機能的磁器共鳴画像法 (fMRI) を用いた検討から、脳の構造や言語課題実施時の脳活動において、SLI と定型発達との間に相違点が見られることが指摘されている (Trauner, Wulfeck, Tallal, & Hesselink, 2000; Hugdahl, Gundersen, Brekke, Thomsen, Rimol, Ersland, & Niemi, 2004; Ellis Weismer, Plante, Jones, & Tomblin, 2005)。また、SLI に関与する可能性のある遺伝子も報告されている (Tomblin, O'Brien, Shriberg, Williams, Murray, Patil, Bjork, Anderson, & Ballard, 2009)。

また、従来から、SLI 児は言語面において改善を示すものの、言語の問題が持続する子ども割合が高いことが指摘されている (Leonard, 1998, 2014)。英語を対象とした研究では、SLI 児の言語の問題が青年期さらには成人期においても持続していることが明らかになっている (Poll, Betz, & Miller, 2010; Rice, Hoffman, & Wexler, 2009; Tomblin, Freese, & Records, 1992)。さらに、SLI 児は言語の問題のみならず、社会的問題、友人関係の問題、経済的問題などを抱えるリスクがあるといわれている (Durkin & Conti-Ramsden, 2007; St Clair, Pickles, Durkin, & Conti-Ramsden, 2011; Records, Tomblin, & Freese, 1992)。そのため、SLI 児を早期に発見し、適切に支援することが求められている。

SLI 児の早期発見とより効果的な支援のためには、SLI のより正確な理解が必要となる。そのためには、それぞれの言語において、SLI の言語特徴を明らかにする必要がある。英語を中心とした欧米の SLI 研究では、SLI の言語特徴は何かを明らかにするための研究が数多くなされてきた。その結果、英語を母語とする SLI 児の言語特徴として、過去時制を示す *-ed*、三人称単数現在を示す *-s* などの文法形態素を脱落させることなどが従来から指摘されている (Gopnik, 1990; Rice, Wexler, & Cleave, 1995)。また、SLI 児の言語特徴は持続することが明らかになっている (Rice, Wexler, & Hershberger, 1998)。したがって、持続性を検討することは個別言語における SLI 児の言語特徴を明らかにする上で有効であることが示唆される。

しかし、我が国における SLI 研究は欧米に比して著しく遅れており、日本語を母語とす

る SLI 児の言語特徴は何であるかは明らかになっていない。教育現場においては、現在でも SLI そのものがあまり知られておらず、SLI 児に対する配慮はほとんどなされていない。したがって、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることは我が国の教育、臨床上及び研究上、極めて重要な研究課題となっている。

第2節 欧米のSLI研究

ここでは、SLIに関する従来の研究を概観する。SLIについては不明な点が多いが、これまでいくつかの仮説が提案されてきた。以下ではまず、これまで提案されてきたSLIについての仮説と関係する研究を紹介する。SLIについての仮説は大きく文法障害仮説 (grammar-deficit hypotheses) と処理障害仮説 (processing-deficit hypotheses)、さらに手続き障害仮説 (procedural deficit hypothesis: PDH) に分類される (Ullman & Pierpont, 2005)。本節では、まず、欧米におけるSLI研究を文法障害仮説、処理障害仮説・手続き障害仮説に分けて概観する。次に、これまで提案された仮説は主として英語、ドイツ語を対象とした研究に基づくものであることを指摘し、英語、ドイツ語以外の言語を対象とした研究を紹介する。

1. 文法障害仮説

文法障害仮説は、SLIは言語の領域、特に文法に関して特異的に障害や遅れが生じているとみなす。以下では、これまで提案されてきた文法障害仮説と関連する研究を概観する。

まず、Gopnikらの一連の研究を紹介する。“feature-blindness account”は、Gopnik (1990) によって提案された仮説である (Fukuda, Fukuda, & Ito, 2015)。この仮説は、SLI児が数、人称、時制、アスペクト、性のような言語学的な素性 (features) に問題を示すとするものである。Gopnik and Crago (1991) は3世代に渡りSLIの兆候を示した家族を対象として、言語課題及び日記の分析を行った。その結果、SLI児・者は時制、アスペクト、数などに困難さを示すことが明らかになった。この結果は、SLI児・者が形態論的側面に障害を受けていることを示していると Gopnik and Crago (1991) は述べている。さらに、Gopnik (1994) は、時制に視点を絞り、Gopnik and Crago (1991) が対象とした家族を対象とし、SLI群と統制群を比較した。その結果、SLI群は時制の屈折の使用に困難さを示すことが明らかになった。また、統制群が不規則形に対して用いる方法 (文法規則ではなく、語彙を用いる方法) を、SLI群は規則形に対して使用する可能性が指摘された。さらに、SLI

児・者は無意識的な言語知識の障害を補うために、宣言的記憶に支えられた補助ストラテジーを使用する可能性が示唆されている (Paradis & Gopnik, 1997)。

次に、Rice と Wexler の一連の研究を紹介する。幼児には過去時制を示す *-ed*、三人称単数現在を示す *-s* などが時々脱落する段階、つまりこれらの形態素の標示が随意的である OI (optional infinitives) 段階が存在するという仮説がある (Wexler, 1994)。この仮説に基づいて、Rice et al. (1995) は、SLI 児はこの OI 段階に長く留まっているという EOI 仮説 (“extended optional infinitive account”) を提唱した。さらに、Wexler, Schütze, and Rice (1998) によれば、Schütze and Wexler (1996) は、時制のみならず、主語の一致 (subject agreement) も脱落するとした (“agr tns omission model (ATOM)”)。Wexler et al. (1998) はこの仮説を用いて、SLI 児の主語代名詞の誤り (例 : Him run) を検討した。その結果、この誤りは、SLI 児、定型発達児ともにみられること、また、このような非主格主語が不定形の動詞で最も多くみられることが明らかになった。このことは、動詞の屈折の有無が主格主語の適切な使用に関係していることを示している。Wexler et al. (1998) は、これらの結果から、SLI 児は定型発達児と同様、動詞の屈折の形態素が主語に主格を要求することは知っている可能性を指摘している。

Wexler (2003) は、OI 段階は英語には当てはまるが、イタリア語やスペイン語などの空主語言語 (null subject language)、すなわち、代名詞主語が顕在化されないことがある言語には必ずしも当てはまらないことを指摘し、EUCC 仮説 (“extended unique checking constraint account”) を提唱した。“unique checking constraint” とは、幼児には素性の照合が一度しかできない段階が存在することを指し、“extended” とは、この段階に長く留まっていることを意味している。Wexler (2003) によると、英語では、時制 (TNS) と一致 (AGR) の両方との照合が行われなければならない。しかし、SLI 児は “unique checking constraint” という制約を受けているため、一方との照合しかできず、結果として、動詞の屈折に誤用が生じるとしている。一方、Wexler (2003) によれば、イタリア語やスペイン語のような空主語言語では、一致との照合が不要となり、時制との照合のみでよくなる。そ

のため、イタリア語やスペイン語のような空主語言語では、動詞の屈折に誤用は生じないと予測されている。

次に、van der Lely らの仮説を紹介する。van der Lely (1994) は SLI 児の言語の困難さは、文法関係の表示 (representations) の障害によって説明されるとした。のちに、この仮説は、RDDR 仮説 (“representational deficit for dependent relationships account”) と呼ばれ、特に指定部と主要部 (spec-head) の依存関係における問題として特徴づけられた (van der Lely, 1996)。さらに、Marshall and van der Lely (2007) は、RDDR 仮説を統語論的側面のみならず形態論的側面や音韻論的側面にも拡大し、CGC 仮説 (“computational grammatical complexity account”) を提唱した。この仮説では、文法的な側面が特に落ちている SLI 児 (grammatical specific language impairment: G-SLI) にみられる言語の困難さは、統語論的・形態論的・音韻論的要素の複雑さに起因するとしている。

最後に、Clahsen らの仮説を紹介する。Clahsen (1989, 1991) はドイツ語を母語とする SLI 児を対象とした検討から、SLI 児が示す言語の困難さは一致 (agreement) の問題によるとする “grammatical agreement deficit account” を提唱した。この仮説における一致とは、主語と動詞の一致のみならず、決定詞や冠詞における数や性の一致、名詞句における格標示など、広義にわたるものであった。のちに、Clahsen, Bartke, and Göllner (1997) は上記の仮説を修正し、狭義の “subject-verb agreement deficit account” を提唱した。この仮説では、広義の一致に対して主語と動詞の一致関係のみに選択的な障害を示すと仮定している。

2. 処理障害仮説・手続き障害仮説

処理障害仮説は、SLI の障害を処理速度が遅いことや処理能力の容量の問題だと考える仮説である (Bishop, 1994; Kail, 1994; Leonard, McGregor, & Allen, 1992; Norbury, Bishop, & Briscoe, 2001)。すべての処理障害仮説が一般的な処理障害を仮定しているわけではなく、特定の認知や処理メカニズムの障害であるという仮説も提案されている。具体的には、音

韻的ワーキングメモリーの機能障害に起因しているのではないかという指摘や (Gathercole & Baddeley, 1990)、音韻に影響する情報処理障害に起因しているという指摘が存在している (Joanisse & Seidenberg, 1998)。

処理障害仮説の中で注目されてきた仮説の一つとして surface 仮説 (“surface account”) がある。surface 仮説は、英語を母語とする SLI 児にみられる文法形態素の問題は処理容量の制限によるものだとし、短く、かつまたは素早く提示される音声素材の処理に問題がみられると仮定している (Leonard, 1998)。また、SLI 児にみられる言語の問題を処理容量の制限によるものだとする “morphological richness account” (Leonard, 1998) も注目されている。この仮説では、英語のような屈折が乏しい言語では、その言語におけるより優勢 (prevalent) な情報、たとえば語順のような統語的側面に SLI 児は限られた resources を注ぐとされている。一方、豊かな形態論を持つ言語においては、限られた resources を形態論的側面に注ぐとされる。したがって、屈折の乏しい言語に比して、豊かな屈折を持つ言語において、SLI 児と定型発達児との差は小さくなると予測されている。

なお、近年、新たに手続き障害仮説 (procedural deficit hypothesis: PDH) も提案されている (Ullman & Pierpont, 2005)。手続き障害仮説は、手続き記憶システムを構成する脳構造の発達の異常によって SLI を説明しようとするものである。Ullman and Pierpont (2005) によれば、手続き記憶システムは、前頭/基底核回路に基づくネットワークによって構成されており、運動や認知スキルの実行や学習に役立っている。SLI はこの脳内ネットワークの異常さに起因しているため、このネットワークに依存している言語機能や非言語機能の障害を導くとされている。

3. 英語、ドイツ語以外の言語を対象とした研究

本節の 1~2 では、SLI に関してこれまで提案されてきた仮説と関連した研究を紹介した。文献から明らかなように、これらの研究は主として英語、ドイツ語を対象としたものである。近年、英語、ドイツ語以外の言語を対象とした SLI 研究が増えつつあり、英語の SLI

児の言語特徴との間に共通点と相違点がみられることが明らかになっている。以下では英語、ドイツ語以外の言語を対象とした SLI 児の研究について概観する。

英語、ドイツ語と同じく屈折言語に属するスウェーデン語については、動詞の形態論的側面に困難さを示し、語順にも問題を示すことが報告されている (Hansson & Nettelbladt, 1995; Hansson, Nettelbladt, & Leonard, 2000)。また、名詞句の形態論的側面にも困難さを示すことが明らかになっており、このことから、スウェーデン語を母語とする SLI 児は動詞の形態論的側面のみならず、名詞句の形態論的側面にも問題をもつことが示唆されている (Leonard, Salameh, & Hansson, 2001)。

一方、英語と同じく屈折言語ではあるが、空主語を許すなどの点で英語と言語学的に大きく異なるイタリア語やスペイン語を母語とする SLI 児も、動詞の形態論的側面の困難さのみならず、冠詞、接語 (clitics) などにも困難さを示すことが明らかになっている (Bedore & Leonard, 2001, 2005; Bortolini, Caselli, Deevy, & Leonard, 2002; Bortolini, Caselli, & Leonard, 1997)。

膠着言語を対象とした研究も近年増えつつある。膠着とは、語彙的意味を持ったいくつかの要素 (形態素) が一語の中に組織的に組み込まれている性質のことである (益岡, 1991)。トルコ語、ハンガリー語、フィンランド語などがこれに属し、日本語も膠着言語であるといわれている。ハンガリー語を対象とした研究においても、動詞の形態論的側面の困難さに加えて (Leonard, Lukács, & Kas, 2012; Lukács, Leonard, Kas, & Pléh, 2009)、名詞の形態論的側面にも問題を示すことが指摘されている (Lukács, Kas, & Leonard, 2013)。また、フィンランド語においても動詞の形態論的側面に困難さを示し (Kunnari, Savinainen-Makkonen, Leonard, Mäkinen, Tolonen, Luotonen, & Leinonen, 2011)、名詞の形態論的側面にも問題がみられると報告がなされている (Leonard, Kunnari, Savinainen-Makkonen, Tolonen, Mäkinen, Luotonen, & Leinonen, 2014)。

このように、英語、ドイツ語以外の言語を対象とした SLI 研究から、SLI 児は動詞の形態論的側面のみならず、名詞や名詞句の形態論的側面にも困難さを示すことが明らかにな

っている。

では日本語を母語とする SLI 児の場合はどうであろうか。Leonard (2014) は、SLI の普遍的な言語特徴を解明する上で、英語以外の言語を対象とした SLI 研究が必要であると指摘している。したがって、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることは、SLI の普遍的な言語特徴を解明する上で貴重な情報を提供すると期待される。

第3節 我が国のSLI研究

本節では、日本語を母語とするSLI児を対象とした従来の知見を概観する。日本語を母語とするSLI児の言語特徴についての先駆的な研究として、Fukuda and Fukuda (1999)がある。Fukuda and Fukuda (1999)は、日本語を母語とするSLI児8例を対象として、時制、アスペクト、格助詞、受動文に視点を当て、統語理解課題、文法性判断課題、時制標識の産出及び文法性判断課題を行った。その結果、いずれの課題においても日本語を母語とするSLI児と定型発達児の間に有意差がみられた。Fukuda and Fukuda (1999)は、これらの結果は、SLI児は無意識的な文法規則を構築できないとするGopnik (1994)の仮説を支持するものであったと述べている。

Fukuda and Fukuda (2001)は、SLI児の複合動詞の語形成能力を検討した。レキシコンの領域内にあるとされる自動詞(例: tao-re-ru)、他動詞(例: tao-s-u)と、レキシコンの領域外にあるとされる受動動詞(例: os-are-ru)、使役動詞(例: hasir-ase-ru)を比較した。語根を与えて接辞を産出させる課題を実施した。対象児は、SLI児、定型発達児各6例であった。その結果、SLI児のレキシコンの領域外にある複合動詞(受動動詞、使役動詞)の正答率は、定型発達児に比して有意に低かった。一方、SLI児はレキシコンの領域内にある複合動詞(自動詞、他動詞)においては、それほど困難さを示さなかった。このような結果は、定型発達児にはみられなかった。これらの結果に基づき、Fukuda and Fukuda (2001)は、SLI児は、語彙的な操作の能力は比較的保たれているが、レキシコンの領域外で生成される語形成にかかわる規則を構築する能力に問題があるのではないかと指摘している。

福田・Fukuda・伊藤・山口(2007)は、SLI児の主格「が」、対格「を」、与格「に」の3種の文法格に関する言語知識を明らかにするため、SLI児3例と定型発達児5例を対象として、格助詞挿入課題を実施した。その結果、SLI児は定型発達児に比して著しく格付与の能力が劣り、特に、SLI児の格付与能力は、かき混ぜ語順文において著しく劣ることが明らかになった。また、福田ら(2007)は、SLI児の誤用パターンから、SLI児が定型発達児と異なる補助ストラテジーを使って、統語／文法発達の未熟さを補おうとしていることがう

かがえると述べている。

Ito, Fukuda, Fukuda, Otomo, Fujino, and Yamaguchi (2008) は、SLI 児 1 例を対象として、1) 動詞が実在語で、高頻度の時を表す副詞（例：昨日）を含む刺激文、2) 動詞が実在語で、低頻度の時を表す副詞句（例：今から 9 日後に）を含む刺激文、3) 動詞が非語で、高頻度の時を表す副詞を含む刺激文、の 3 種類の正誤判断課題と産出課題を実施した。その結果、9 歳の時点では高頻度の時を表す副詞を用いた刺激文の正答率は、低頻度の時を表す副詞句を用いた刺激文の正答率に比して高い傾向にあった。また、非語を用いた刺激文は、同じ高頻度の時を表す副詞を含んだ実在語の刺激文の正答率よりも低かった。さらに、非語を用いた刺激文の産出課題の正答率は 14 歳の時点でも 25%と低かった。これらの結果から、SLI 児の課題の成績には用いられる副詞表現が高頻度か低頻度か、用いられる動詞が実在語か非語かが影響することが示唆されている。

Ito, Fukuda, and Fukuda (2009) は、SLI 児 1 例の 9 歳から 14 歳までの縦断データを用いて、文法的側面の発達を、時制、受動文、格助詞、指示代名詞に視点を当てて検討した。また、語彙的側面の発達を、絵画語彙発達検査 (PVT) の結果から検討した。その結果、語彙年齢は著しく伸びるものの、非語を用いた時制の課題や逆語順の受動文の課題では 14 歳の時点でも正答率がそれぞれ 25%、62.5%であった。しかし、指示代名詞に関しては、11 歳から 12 歳の間で正答率が 50%から 100%となった。これらの結果から、語彙は著しく伸びるが、時制や受動文の伸びはあまりみられず、指示代名詞はその中間的な伸びを示すことが示唆された。

Ito, Fukuda, and Fukuda (2011) は、日本語を母語とする SLI 児がアスペクトの構築に困難さを示すかどうかを、SLI 児 2 例 (A 児、B 児) の自然発話の分析と産出課題を実施して検討した。産出課題は、16 名の小学生にも実施し、比較した。その結果、自然発話の正答率は A 児 100%、B 児 94.4%であった。一方、産出課題の正答率は A 児 50.0%、B 児 77.5%であり、自然発話の正答率に比して低かった。また、定型発達児の正答率は 95.9%であり、SLI 児 2 例の課題の正答率が定型発達児の正答率よりも有意に低かった。さらに、SLI 児の

誤用の特徴として、過去を示す副詞表現が含まれている刺激文（例：昨日から新しい消しゴムを使_____。）において、アスペクト（～テイル）を使用すべきところで過去時制（～タ）を使用する誤りが観察された。このような特徴は定型発達児にはみられなかった。これらのことから、日本語を母語とする SLI 児は、自然発話においてはアスペクトの誤用がみられないが、実験課題を用いるとアスペクトが十分には獲得されていないこと、SLI 児はアスペクトの言語知識の問題を補うために補助ストラテジーを用いることが示唆されている。

Fukuda, Fukuda, and Ito (2011) は、受動文の獲得について、SLI 児 1 例（10 歳）に受動文の検査を 10 歳 1 カ月から 10 歳 6 カ月まで月に 1 回、縦断的に行った。その結果、5 回目（10 歳 5 カ月）の検査時に SLI 児は自分自身で正答を導くための補助ストラテジーを使用した。その後は、課題をすべて正答できるようになり、逆語順の受動文を用いた課題でも、そのストラテジーを応用して正答を導くことができた。この結果は、SLI 児が補助ストラテジーを用いて言語の困難さを補うとする仮説（Paradis & Gopnik, 1997）を支持するものであった。

以上の研究は、文法障害を中心に検討したものであるが、文法障害のみならず、処理や記憶などにも視点を当てた検討も行われている。

田中・渡邊・白邦・Menn (2001) は、SLI が疑われる 5～6 歳の 15 名の幼児を対象として、統語関係の理解及び表出、音韻的短期記憶に視点を当てた実験課題を行った。その結果、5 歳の SLI 児はほぼすべての課題で暦年齢統制群に比して成績が低く、6 歳の SLI 児においては、受動形や使役形の表出面の成績が暦年齢統制群に比して有意に低いことが明らかになった。

田中 (2003) は自身のスクリーニング検査で SLI と同定した SLI 児 8 例と暦年齢及び言語発達を合わせた定型発達児、知的障害児を対象として、文理解課題を行い、SLI 児が情報処理能力に制約があるのかどうかを検討している。その結果、SLI 児の問題の背景には、言語情報処理能力の欠陥があると指摘している。

大伴 (2004) は二卵性双生児である 2 例の SLI 児を対象として、自然発話の分析と復唱

課題を用いた検討を行った。その結果、自然発話において 2 例に共通してみられた誤用は、助詞の誤用・省略、「の」の過剰生成、動詞・形容詞と付属語結合の誤用であった。一方、復唱課題においては、語尾活用を含む動詞及び格助詞、接続助詞などに誤用がみられた。大伴 (2004) は、誤用の背景には、音韻的情報処理、聴覚的短期記憶、統語的処理などの側面の問題が考えられると指摘している。

このように、研究の数は少ないものの、これまでの日本語を母語とする SLI 児の研究から、SLI 児が格助詞、時制、アスペクト、受動文の使用に困難さを示すことが示唆されている。したがって、本研究では、格助詞、時制、アスペクト、受動文の 4 つに視点を当てて、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を検討する。また、SLI 児の言語の問題は持続するという知見 (Leonard, 1998, 2014) を踏まえると、格助詞、時制、アスペクト、受動文の困難さが持続するのかどうかについても検討する必要がある。この持続性を検討するためには、長期間にわたる縦断研究が必要である。また、日本語を母語とする SLI 児に関する従来の研究のほとんどが小数例を対象としたものである。日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにするためには、多数例を対象とした検討が不可欠である。

第4節 本論文の目的及び構成

第1節から第3節で述べたように、SLI 児の早期発見とより効果的な支援のためには、SLI のより正確な理解が必要となる。そのためには、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにする必要がある。近年、英語以外の言語を対象とした SLI 研究から、英語の SLI 児の言語特徴との間に共通点と相違点がみられることが明らかになりつつある。SLI の普遍的な言語特徴を明らかにする上で、英語以外の言語を対象とした研究が必要であることが指摘されている (Leonard, 2014)。したがって、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることが教育、臨床上必要であるだけでなく、SLI の普遍的な言語特徴を解明する上でも重要である。また、研究の数は少ないものの、これまでの研究から、日本語を母語とする SLI 児が格助詞、時制、アスペクト、受動文に困難を示すことが示唆されている (Fukuda & Fukuda, 1999; Fukuda & Fukuda, 2001; Fukuda et al., 2011; 福田ら, 2007; Ito et al., 2009, 2011; Ito et al., 2008; 大伴, 2004; 田中, 2003; 田中ら, 2001)。言語の問題は持続するという知見 (Leonard, 1998, 2014) を踏まえると、格助詞、時制、アスペクト、受動文の困難さが持続するのかどうかについて検討する必要がある。また、日本語を母語とする SLI 児に関する従来の知見のほとんどは小数例を対象としたものであり、日本語の SLI 児の言語特徴を明らかにするためには、多数例を対象とした検討が不可欠である。

以上を踏まえ、本研究では、日本語を母語とする SLI 児を対象として、1) 格助詞、時制、アスペクト、受動文に視点を当て、2) 2例の約10年にわたる自然発話データの縦断研究と、3) 多数例を対象とした横断研究を行うことによって、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴を明らかにすることを目的とする。

論文の構成は以下のとおりである。

第1章は序論である。

第2章は SLI 児 2例の縦断研究である。第1節では、自然発話における誤用の全体的な特徴を検討する。第2節では、自然発話における格助詞の誤用について検討する。第1項

では、格助詞の誤用の特徴を構造格と内在格という枠組みから検討する。第 2 項では、格助詞の誤用の持続性を検討する。第 3 節では、自然発話における時制・アスペクト・受動文の誤用について検討する。第 1 項では、時制の誤用の特徴と持続性について検討する。第 2 項では、アスペクトの誤用の特徴と持続性について検討する。第 3 項では、受動文の誤用の特徴と持続性について検討する。

第 3 章は SLI 児多数例を対象とした横断研究である。第 1 節では、実験課題と自然発話における格助詞の誤用率の比較を行う。第 2 節では、格助詞の誤用に及ぼす語順、態の影響を検討する。

第 4 章は総合考察である。本研究で得られた知見と従来知見に基づき、第 1 節では、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴について、第 2 節では、第 1 節で述べた SLI 児の言語特徴の臨床的意義について述べる。第 3 節では、縦断研究で対象とした 2 例の言語特徴の比較を行う。

第 2 章

SLI 児 2 例を対象とした縦断研究

第1節 自然発話における誤用の全体的な特徴

1. 目的

日本語を母語とする SLI 児において格助詞、時制、アスペクト、受動文などに問題がみられることが実験課題を用いた検討を中心に報告されているが (Fukuda & Fukuda, 1999; Fukuda & Fukuda, 2001; Fukuda et al., 2011; 福田ら, 2007; Ito et al., 2009, 2011)、日本語を母語とする SLI 児の自然発話にみられた誤用の全体的な特徴について検討したものはほとんどなく (大伴, 2004)、SLI 児の発話の全体的な特徴については不明点が多い。そこで本節では、日本語を母語とする SLI 児 2 例の自然発話における誤用の全体的特徴を検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は通常学級に在籍する女児 A と男児 B の 2 例であった。A 児 9 歳 10 カ月、B 児 10 歳 0 カ月時のプロフィールを表 1 に示した。2 例は自然発話において格助詞、時制、アスペクト、受動文、指示詞などの誤用を示し、かつ Tallal, Townsend, Curtiss, and Wulfeck (1991) の SLI の除外式診断基準 (表 2) を満たしていたため、SLI であると推測された。この 2 例は福田ら (2007)、Ito et al. (2011) によって既に SLI とみなされている。2 例のデータ収集については、保護者に研究の目的、方法、個人情報の取り扱いなどについて口頭及び文書で説明を行い、書類による同意を得て実施した。なお、家庭教師として学校の授業の学習を支援し、必要に応じて、保護者から相談には応じてきたが、SLI 児 2 例に対して言語についての指導は特に行っていない。

また、SLI 児と比較するために、誤用が比較的多く生じると考えられる定型発達児 (幼児) の自然発話にみられた誤用も分析した。対象児は 3~4 歳児 19 名 (3 歳児 13 名、4 歳児 6 名) であった。この幼児は伊藤 (1982) においても対象となっており、伊藤 (1982) によれば生育歴及び保育士の報告から、定型発達を示すと推測されている。定型発達児のデ

ータについても、保育所の同意を得て収集されたものである。

2.2 手続き

SLI 児 2 例の自然発話データは、筆者が所属する伊藤研究室において、筆者及びその他の学生・院生らによって縦断的に収集されてきたものである。A児、B児それぞれについて原則として週に 1 回、対象児宅でデータ収集者との 15～30 分の自由会話場面の発話をカセットレコーダー (TCM-400, SONY) を用いて録音したものである。A児については、10 歳 0 カ月～20 歳 0 カ月、B児については、6 歳 4 カ月～16 歳 4 カ月のデータが存在するが、本節では、A児に関しては、収集開始時の 10 歳 0 カ月～11 歳 0 カ月の 1 年間のデータ (総発話数 1159、総録音時間約 289 分) を、B児に関しては、A児の収集開始時と対応するように、10 歳 3 カ月～11 歳 6 カ月の 1 年 3 カ月間のデータ (総発話数 1164、総録音時間約 166 分) を分析した。

比較のための定型発達児の自然発話データは、保育所での自由会話場面から、一人あたり 100 発話を原則として収集された研究室のデータを用いた。19 名の総発話数 1642 を分析した。

大久保 (1973) を参考に、「文末とするとところに動詞の終止形とか終助詞があり、いくらかの間が認められたり、イントネーションもさがっており、(疑問形式はあがる。) 声も消えかかっている」ものを一発話とした。なお、歌唱場面、ことばに関する課題場面での発話、不明瞭な発話は分析から除外した。

2.3 分析方法

SLI 児及び定型発達児の全自然発話を文字化した。文字化されたデータから、誤用と思われる表現を抽出した。誤用の同定と分類には 2 名があたった。誤用の同定についての評価者間の一致度は 90.2%であった。一致した誤用のみを分類の対象とした。誤用の分類についての評価者間の一致度は 100.0%であった。

3. 結果

誤用の分析には言語学的分類がよく用いられる。例えば、失文法者の誤用を言語学的視点から分類したのとして神尾（1986）があり、第二言語習得者の誤用については、寺村（1982）がある。また、幼児や SLI 児の発話の誤用分析においても言語学的視点から分類が行われている（伊藤，1990；大伴，2004）。そこで本研究においても、これらの分類を踏まえて、SLI 児 2 例の誤用を言語学的視点から分析した。2 例の誤用は、形態論的・統語論的誤用、語彙の誤用、談話の誤用、創造的誤用に分けられた。本研究における、創造的誤用とは、形態論、統語論、語彙、談話のような明確な分類が困難な誤用を指す。なお、本節で分析した発話データには、音韻的誤用は認められなかった。表 3 に誤用の分類カテゴリーとその内容を示した。

表 4 は SLI 児 2 例と定型発達児の各誤用の数と割合を示している。A 児、B 児ともに、形態論的・統語論的誤用の割合が最も高く、次いで創造的誤用の割合が高かった。2 例それぞれについて χ^2 検定を行った結果、A 児 ($\chi^2(3) = 80.42, p < .001$)、B 児 ($\chi^2(3) = 32.63, p < .001$) とともに誤用の偏りが有意であった。ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、A 児においては、形態論的・統語論的誤用とすべての項目との間に有意差が認められた。B 児においては、形態論的・統語論的誤用と語彙の誤用、談話の誤用との間に有意差が認められたが、創造的誤用との間には有意差が認められなかった。一方、定型発達児（3～4 歳児 19 名）の総発話数は、A 児、B 児よりも多いにもかかわらず、誤用は 6 個のみ（形態論的・統語論的誤用 3、創造的誤用 2、語彙の誤用 1）であった。

表 5 は SLI 児 2 例の形態論的・統語論的誤用を益岡・田窪（1992）を参考にした下位カテゴリーを用いて分類し、誤用数と誤用全体に占める割合を示したものである。A 児、B 児ともに格助詞の誤用の割合が他の誤用に比して高い傾向にあった。誤用数が少ない項目が含まれているが、下位カテゴリーごとのデータを検討するために、A 児、B 児それぞれについて χ^2 検定を行った結果、A 児 ($\chi^2(8) = 44.7, p < .001$)、B 児 ($\chi^2(8) = 59.0, p < .001$) とともに誤用の偏りが有意であった。ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果、

A児においては、格助詞の誤用は、「複文」、「その他の助詞」との間を除きすべての項目との間に有意差が認められ、B児では、格助詞の誤用とすべての項目との間に有意差が認められた。なお、3～4歳児19名の定型発達児にみられた形態論的・統語論的誤用は総発話数1642中わずか3個（格助詞の誤用1、指示詞の誤用1、副詞の誤用1）であった。

表6はSLI児2例の創造的誤用の例を示したものである。創造的誤用としては、伝えたい内容は推測できるが、表現の形式が日本語として正しくない表現や解釈困難な表現などが観察された。なお、定型発達児にみられた創造的誤用は2個のみであり、「そこ一人だらけ（一人だけ）」と「泥棒来るようにね（来ないようにね）刀持ってるんだ」であった。

表7はSLI児2例と定型発達児の誤用率を比較したものである。一発話あたりの誤用数を誤用率として算出した。この表から明らかなように、SLI児2例の誤用率は定型発達児の誤用率に比して著しく高かった。

4. 考察

本節の目的は、日本語を母語とするSLI児2例の自然発話データを用いてSLI児の自然発話全体の誤用の特徴を明らかにすることであった。

その結果、SLI児2例の誤用は、形態論的・統語論的誤用、語彙の誤用、談話の誤用、創造的誤用に分けられ、SLI児2例ともに、形態論的・統語論的誤用の割合が最も高く、次いで創造的誤用の割合が高かった。なお、定型発達児については、誤用自体が著しく少なかったため、誤用の割合について明確な結果は得られなかったが、SLI児2例の結果から、日本語を母語とするSLI児の誤用全体の特徴として、形態論的・統語論的誤用が中核をなすことが示唆された。このことは、SLI児が形態論的側面または統語論的側面に困難を示すことを指摘した従来の知見（Gopnik, 1994; Rice et al., 1995; van der Lely, 1994）を支持するものであった。

さらに、SLI児2例の形態論的・統語論的誤用について詳しく検討すると、A児、B児ともに格助詞の誤用の割合が高い傾向にあった。この結果から、日本語を母語とするSLI

児が格助詞の使用に困難を示すことが推測された。ドイツ語及び英語の SLI 児では格標識の使用に困難を示すことが指摘されている (Clahsen, 1989, 1991; Loeb & Leonard, 1991; Radford & Ramos, 2001)。日本語においても、SLI 児が格助詞の使用に困難を示すことが報告されている (福田ら, 2007; 石田, 2003; 大伴, 2004)。本研究の結果は、それらの知見とも一致していた。

なお、SLI 児 2 例の自然発話には従来から報告されている形態論的または統語論的な誤用に次いで創造的誤用が多くみられた。この結果から、創造的誤用がみられることも日本語を母語とする SLI 児の誤用の特徴の一つである可能性が示唆された。Marshall and van der Lely (2012) も SLI 児が示した誤用の中に統語論的、形態論的、音韻論的誤用に含まれない “other errors” がみられたとしている。Marshall and van der Lely (2012) が指摘しているように、SLI 児の “other errors” についてはこれまで詳しい検討がなされていない。今後、SLI 児の普遍的な言語特徴を明らかにする上で、このような誤用についても詳しく検討する必要があると思われる。

A 児、B 児には上記のような共通した特徴もみられたが、A 児に比して B 児は形態論的・統語論的誤用以外の誤用も比較的多くみられた点で異なっていた。SLI 児は同質ではなく、言語のどの側面に困難さを示すかという点で互いに異なることが指摘されている。本研究の結果においても、A 児と B 児の間には共通点もあるが、相違点もみられることが示唆された。

表 1 対象児のプロフィール

対象児	性別	生活年齢	WISC-III		絵画語い発達検査	
			VIQ	PIQ	語い年齢	評価点
A	女	9:10	82	97	6歳7カ月	5
B	男	10:0	68	87	7歳10カ月	6

表 2 Tallal et al. (1991) の SLI の除外式診断基準

-
1. WISC-R/IIIにおける動作性 IQ が 85 以上である (あるいはそれと同等)
 2. 聴覚障害がない
 3. 口腔器官の運動機能の障害や器質的障害がない
 4. 自閉症でない (DSM III-R/IVの定義による)
 5. 周期的な中耳炎の経歴がない
 6. 明らかな神経学的な障害がない
 7. 顕著な情緒障害がない
-

(福田ら, 2007)

表 3 誤用の分類カテゴリー

分類	内容
形態論的・ 統語論的誤用	格助詞、時制・アスペクト、受動形・使役形・可能形、などの誤用 例：関越道と中央道が（を）* つなぐやつ
語彙の誤用	誤った語彙の使用 例：何小学校に入ってた（通ってた）？
談話の誤用	質問・応答の際などの不適切な反応 例：お昼食べたあと（「どこで食べたの？」と尋ねられたとき）
創造的誤用	形態論、統語論、語彙、談話のような明確な分類が困難な誤用 例：カビになって死んじゃうんだよ（カビが原因で死ぬということ） 例：この車はこんなところってゆーのは分からないぞ（解釈困難な表現）

* 括弧内は意図していると思われることなどを指す。

表 4 SLI 児 2 例と定型発達児の各誤用の数と割合

対象児	A 児		B 児		定型発達児	
	誤用数	(%)	誤用数	(%)	誤用数	(%)
形態論的・統語論的誤用	54	(62.8)	40	(43.0)	3	(50.0)
創造的誤用	25	(29.1)	33	(35.5)	2	(33.3)
語彙の誤用	6	(7.0)	14	(15.1)	1	(16.7)
談話の誤用	1	(1.2)	6	(6.5)	0	(0)
計	86	(100.0)	93	(100.0)	6	(100.0)

表 5 SLI 児 2 例の形態論的・統語論的誤用における各下位カテゴリーの誤用数と割合

分類	A 児		B 児	
	誤用数	(%)	誤用数	(%)
複文	9	16.7	3	7.5
活用語	4	7.4	3	7.5
指示詞	4	7.4	0	0
副詞	2	3.7	2	5.0
格助詞	20	37.0	19	47.5
その他の助詞	7	13.0	6	15.0
受動・使役・可能	3	5.6	2	5.0
時制・アスペクト	1	1.9	1	2.5
その他	4	7.4	4	10.0
計	54	100.0	40	100.0

表 6 SLI 児 2 例の創造的誤用の例

A 児

夏休みちょっと終わりに (夏休みの終わりごろに)*

あんまり緊張できなかった (あんまり緊張しなかった)

お風呂を入浴している (お風呂に入っている)

ドクゲールが一番、毒、毒蛾 (一番毒性の強い蛾ということ)

猫も変装なんかあるし (猫も変装をするということ)

B 児

来週行きだよ (来週行くよ)

いないところに (見つからないところに) 隠れたりして

生まれるときに生きな (生まれ変わったな)

もっと釣れてみろよ (頑張って釣ろうということ)

お前はこそれているという意味だ (解釈困難な表現)

* 括弧内は意図していると思われることなどを指す.

表 7 SLI 児 2 例と定型発達児の誤用率

	総発話数	誤用総数	誤用率 (%)
A児	1159	86	7.4
B児	1164	93	8.0
定型発達児 (19 名)	1642	6	0.4

第2節 自然発話における格助詞の誤用

第1項 格助詞の誤用の特徴

1. 目的

第1節の結果、SLI児2例の自然発話における誤用の全体的な特徴として、2例ともに形態論的・統語論的誤用の割合が高く、その中でも格助詞の誤用の割合が高いことが示された。そこで第2節では、格助詞の誤用について詳しく検討する。

生成文法理論においては、構造格と内在格という2分法が格の問題を扱う際の基本的な枠組みの一つである。三原(1994)によれば、日本語では、構造格の格助詞が「が」「を」、内在格の格助詞が「が」「を」以外に分類される。構造格と内在格は、構造格の格助詞が固有の意味がないのに対し、内在格の格助詞が「大阪から(起点)」「大阪に(着点)」「大阪で(場所)」のように固有の意味を有している点で異なる。したがって、構造格と内在格という枠組みを用いることにより、SLI児の格助詞の誤用の背景となっている格の知識の特徴が明らかになると期待される。

そこで本項では、SLI児2例の自然発話にみられた格助詞の誤用の特徴を構造格と内在格という枠組みを用いて詳しく検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、第1節と同一のSLI児2例と2～6歳の定型発達児45名(2歳児7名、3歳児9名、4歳児11名、5歳児12名、6歳児6名)であった。

定型発達を示す幼児45名は伊藤(1982)においても対象となっており、伊藤(1982)によれば生育歴及び保育士の報告から、定型発達を示すと推測されている。また、この45名のデータについても、保育所の同意を得て収集されたものである。

2.2 手続き

SLI 児の発話は、第 1 節と同様の方法で収集されたものであった。第 1 節の結果から明らかのように、2 例の自然発話における誤用率（一発話あたりの誤用数）は A 児、B 児それぞれ 7.4%、8.0% と極めて低い。そのため、本研究では、なるべく多くの誤用を分析するため、対象とした期間を広げ、格助詞の誤用のみを分析した。また、A 児のほうが B 児に比して誤用が少なかったため、A 児に関しては 10 歳 0 カ月～14 歳 9 カ月のデータを、B 児に関しては、9 歳 2 カ月～11 歳 4 カ月のデータを分析した。A 児、B 児ともに、それぞれの期間において格助詞の誤反応の内容に変化がみられなかったため、一括して分析した。

定型発達児の自然発話も、第 1 節と同様の方法で収集されたものであった。一人あたり 100 発話を原則として収集されたものであり、45 名の総発話数 3865 を分析した。

2.3 分析方法

本項では、格助詞の省略や不要な箇所で使用されている格助詞は分析から除外した。先に述べたように、三原（1994）によれば、日本語では、構造格の格助詞が「が」「を」、内在格の格助詞が「が」「を」以外に分類される。一方、格助詞の「に」には構造格の性質を持つものと内在格の性質をもつものが存在することが従来から指摘されている（伊藤, 1996; 寺尾, 1995）。そのため、本研究では格助詞の「に」を分析から除き、「が」「を」を構造格、それ以外を内在格とする枠組みを用いて分析した。

なお、誤用の同定には 2 名があたった。2 名の評価者の同定が一致したもののみを分析対象とした。

3. 結果

A 児、B 児にみられた格助詞の誤用例は表 8 に示した通りである。表 9 は A 児における格助詞の誤用の特徴を示している。 χ^2 検定の結果、構造格の格助詞の位置での誤用のほう

が内在格の格助詞の位置での誤用より有意に多かった ($\chi^2(1) = 15.24, p < .001$)。また、構造格の格助詞の位置での誤用では、他の構造格の格助詞への誤用と内在格の格助詞への誤用の間に有意差は認められなかった。

表 10 は B 児における格助詞の誤用の特徴を示している。 χ^2 検定の結果、A 児と同様に構造格の格助詞の位置での誤用のほうが内在格の格助詞の位置での誤用より有意に多かった ($\chi^2(1) = 9.31, p < .005$)。また、構造格の格助詞の位置での誤用では、他の構造格の格助詞への誤用と内在格の格助詞への誤用の間に有意差は認められなかった。

一方、定型発達児の誤用は 3 個のみであり、3 個すべてが構造格の格助詞の位置での誤用であった。なお、構造格の格助詞の位置での誤用では、3 個中 2 個が他の構造格の格助詞への誤用であった。

表 11 は格助詞の総使用数に対する誤用数の割合を誤用率として構造格の格助詞の誤用率と内在格の格助詞の誤用率を比較したものである。本研究における録音時間の合計は、A 児については 30 時間以上、B 児については 20 時間以上であったため、その中の A 児約 290 分 (総使用数 427)、B 児約 210 分 (総使用数 283) の録音を抽出して分析した。A 児、B 児、定型発達児ともに構造格の格助詞の誤用率が内在格の格助詞の誤用率に比して高い傾向にあった。A 児、B 児、定型発達児それぞれについて直接確率計算を行った結果、A 児においては、構造格の格助詞の誤用率と内在格の格助詞の誤用率の間に有意差が認められ (両側検定: $p = .04$)、B 児においても、構造格の格助詞の誤用率と内在格の格助詞の誤用率の間に有意差が認められた (両側検定: $p = .01$)。また、定型発達児においても、両者の間に有意差が認められた (両側検定: $p = .01$)。

4. 考察

本項の検討の結果、誤用数についてみると、2 例ともに構造格の格助詞の位置での誤用数が内在格の格助詞の位置での誤用数に比して有意に多く、誤用率 (格助詞の総使用数に対する誤用数の割合) についても、構造格の格助詞の誤用率が内在格の格助詞の誤用率に

比して高いという点では定型発達児（幼児）の結果と一致していた。

一方、構造格の格助詞の位置での誤用において、定型発達児では、誤用 3 個中 2 個が他の構造格の格助詞への誤用であったのに対し、SLI 児では、他の構造格の格助詞への誤用と内在格の格助詞への誤用とが同程度みられた。これらの結果から、SLI 児は構造に基づく格付与の知識が定型発達児に比して不完全であり、SLI 児は構造格と内在格の違いに関する知識を定型発達児ほど十分には獲得していない可能性が示唆された。しかし、定型発達児のデータ数が少ないことから、今後さらに検討する必要がある。

表 8 SLI 児 2 例における格助詞の誤用例

構造格の格助詞の位置での誤用	
構造格の格助詞へ	チョコが (を) *ねー、3 個持ってきちゃった
内在格の格助詞へ	紙のタバコで (を) 使ったのか
係助詞へ	最初にマジックは (を) やりたいと思います
副助詞へ	なんで大学でえんぴつなんて (を) 使わないの
内在格+係助詞へ	インターでは (が) 近いんだよ
内在格の格助詞の位置での誤用	
構造格の格助詞へ	黒い靴を (と) ズボンを着て
内在格の格助詞へ	ここで (から) 来るのか
係助詞へ	今度、ブレイブストーリー買ってこよ、お、おこづかいは (で)

* 括弧内は格助詞の正しい使用を示す.

表9 A児における格助詞の誤用の特徴

構造型の格助詞の位置での誤用				内在格の格助詞の位置での誤用	
構造型の 格助詞へ	内在格の 格助詞へ	係助詞へ	副助詞へ	内在格の 格助詞へ	構造型の 格助詞へ
が→を (2) *	が→で (2)	が→は (1)	を→なんて (1)	から→で (2)	の→が (1)
を→が (9)	が→の (4)	が→も (1)	を→なんか (1)	で→から (2)	と→を (1)
	が→から (1)	を→は (3)		と→の (1)	で→を (1)
	が→と (1)	を→も (1)			
	を→で (5)				
	を→と (1)				
計	11	14	6	2	5
		33			8

* 括弧内の数値は誤用数を示す。

表 10 B児における格助詞の誤用の特徴

構造格の格助詞の位置での誤用				内在格の格助詞の位置での誤用		
構造格の 格助詞へ	内在格の 格助詞へ	係助詞へ	格助詞+ 係助詞へ	内在格の 格助詞へ	構造格の 格助詞へ	係助詞へ
が→を (5) *	を→で (12)	が→は (3)	が→では (1)	から→で (3)	で→が (2)	で→は (1)
を→が (10)	を→の (3)	を→は (2)		まで→から (1)	で→を (1)	で→も (1)
	を→と (1)			で→と (1)	の→が (2)	
				で→の (2)	の→を (1)	
計	15	16	5	1	7	6
		37				2
					15	

* 括弧内の数値は誤用数を示す.

表 11 構造格と内在格の格助詞の誤用率

	構造格の格助詞			内在格の格助詞		
	総使用数	誤用数	誤用率 (%)	総使用数	誤用数	誤用率 (%)
A児	152	7	4.6	275	3	1.1
B児	107	6	5.6	176	1	0.6
定型発達児 (45 名)	151	3	2.0	495	0	0

第 2 項 格助詞の誤用の持続性

1. 目的

序で述べたように、SLI 児の言語の困難さは持続することが指摘されている (Leonard, 1998, 2014)。この指摘を踏まえると、格助詞の誤用が日本語を母語とする SLI 児の言語特徴の中核をなす問題であれば、その誤用は持続すると予測される。そこで本項では、SLI 児 2 例の縦断データの収集開始期と収集終了期を比較することによって、SLI 児の自然発話における格助詞の誤用の持続性について検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、第 1 節と同一の SLI 児 2 例であった。

2.2 手続き

SLI 児 2 例の発話は第 1 節と同様の方法で収集されたものであった。A 児に関しては、収集開始期として、生活年齢 10 歳 0 カ月～11 歳 0 カ月のデータ (総発話数 1159、総録音時間 289 分) と、収集終了期として、生活年齢 17 歳 11 カ月～19 歳 5 カ月のデータ (総発話数 722、総録音時間 197 分) を比較した。B 児に関しても、収集開始期として、生活年齢 6 歳 4 カ月～7 歳 4 カ月のデータ (総発話数 818、総録音時間 249 分) と、収集終了期として、生活年齢 14 歳 2 カ月～15 歳 9 カ月のデータ (総発話数 1471、総録音時間 258 分) を比較した。

2.3 分析方法

分析対象とした収集開始期及び収集終了期の全自然発話を文字化した。その中から格助詞の誤用を抽出し、誤用率を以下のように算出した。

$$\text{格助詞の誤用率 (\%)} = \frac{\text{格助詞の誤用数}}{\text{総発話数}} \times 100$$

なお、ここでは誤用率の分母を総発話数とした。誤用の同定には 2 名があたった。2 名の評価者の同定が一致したもののみを分析対象とした。

3. 結果

A 児の格助詞の誤用率を算出すると、収集開始期は 1.7% (20/1159)、収集終了期は 0.3% (2/722) であった。収集開始期の誤用率と終了期の誤用率の間に減少傾向がみられた。直接確率計算を行った結果、収集開始期と収集終了期との間に有意差が認められた (両側検定: $p = .005$)。また、B 児の格助詞の誤用率を算出すると、収集開始期は 2.4% (20/818)、収集終了期は 1.4% (20/1471) であり、A 児と同様、収集開始期の誤用率と終了期の誤用率の間に減少傾向がみられた。 χ^2 検定を行った結果、収集開始期と収集終了期との間には有意傾向であった ($\chi^2(1) = 3.61, .05 < p < .10$)。

4. 考察

本項の目的は、SLI 児 2 例の約 10 年にわたる自然発話データの収集開始期と収集終了期を比較することによって、格助詞の誤用の持続性を検討することであった。その結果、格助詞の誤用率は 2 例ともに著しく低下していた。この結果は、日本語を母語とする SLI 児の自然発話における格助詞の誤用が著しく減少することを示している。では、格助詞の使用の困難さそのものが解消されたのだろうか。

既に述べたように、英語を対象にした SLI 研究においては、SLI 児における言語の困難さは、改善はするものの持続することが指摘されている (Leonard, 1998, 2014)。そこで、SLI 児 2 例についても、言語の困難さが持続している可能性について考察する。第 1 節では、誤用が多く生じると考えられる 3~4 歳の幼児 19 名の自然発話を分析した。この 19

名の格助詞の誤用率を本項と同様に算出すると、3～4歳の定型発達児の格助詞の誤用率は0.1% (1/1642) となる。この結果と本研究の結果を比較すると、格助詞の誤用が著しく減少したA児の格助詞の誤用率 0.3%は定型発達児の誤用率に比して高い傾向にあることが分かる。これらの結果から、本研究で対象としたSLI児2例も自然発話における格助詞の誤用率は低下するものの、定型発達児との差は依然として存在すると推察された。このことから、格助詞の誤用は減少するものの、困難さは持続している可能性が示唆された。

第3節 自然発話における時制・アスペクト・受動文の誤用

第1項 時制の誤用の特徴と持続性

1. 目的

第1項では、時制について検討する。時制を表す文法形態素（*-ed*など）の脱落は英語を母語とする SLI 児の臨床的指標の一つとなるといわれている（Rice & Wexler, 1996）。日本語を母語とする SLI 児においても、実験課題を用いた検討より、時制に困難さを持つことが明らかになっている（Fukuda & Fukuda, 1999; Ito et al., 2009）。しかし、日本語を母語とする SLI 児の自然発話における時制の誤用の特徴や持続性については明らかになっていない。そこで本項では、SLI 児 2 例の自然発話における時制の誤用の特徴と持続性について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、第1節と同一の SLI 児 2 例と第2節第1項と同一の 2～6 歳の定型発達児 45 名（2 歳児 7 名、3 歳児 9 名、4 歳児 11 名、5 歳児 12 名、6 歳児 6 名）であった。

2.2 手続き

SLI 児の発話は第1節と同様の方法で収集されたものであった。誤用の特徴については、対象とした全期間から動詞における時制の誤用のみを抽出した。A 児に関しては、10 歳 0 カ月～20 歳 0 カ月までのデータを、B 児に関しては、6 歳 4 カ月～16 歳 4 カ月までのデータを分析した。定型発達児 45 名の自然発話は、第2節第1項と同一の自然発話データを分析した（総発話数 3865）。

誤用の持続性については、SLI 児 2 例の自然発話データのみを分析対象とした。A 児では、収集開始期として、生活年齢 10 歳 0 カ月～11 歳 1 カ月のデータ（総発話数 2376、総録音時間 552 分）と収集終了期として、生活年齢 19 歳 1 カ月～20 歳 0 カ月のデータ（総

発話数 615、総録音時間 221 分) を比較した。B 児では、収集開始期として、生活年齢 6 歳 4 カ月～7 歳 5 カ月のデータ (総発話数 1818、総録音時間 463 分) と収集終了期として、生活年齢 15 歳 5 カ月～16 歳 4 カ月のデータ (総発話数 1256、総録音時間 217 分) を比較した。

2.3 分析方法

英語を母語とする SLI 児における時制の誤用の特徴と比較するために、主動詞 (従属節及び並列節を除く) の時制の誤用のみを抽出し、分析した。なお、解釈困難な発話に含まれる主動詞は分析から除外した。

持続性については、分析対象とした収集開始期及び収集終了期の全自然発話を文字化し、その中にみられた主動詞における時制の正用数と誤用数から誤用率を以下のように算出した。

$$\text{時制の誤用率 (\%)} = \frac{\text{誤用数}}{\text{正用数} + \text{誤用数}} \times 100$$

誤用の同定には 2 名が当たった。2 名の評価者の同定が一致したもののみを分析対象とした。SLI 児の自然発話における誤用の同定の一致度は 92.2% であり、定型発達児は 100.0% であった。

3. 結果

表 12 は SLI 児 2 例における時制の誤用例を示したものである。非過去形を過去形へ置換した例「7 歳になりました」は、家庭教師が B 児に「何歳になるの？」と尋ねた後の発話である。この時点ではまだ 7 歳になっていないので、「7 歳になります」が自然だと思われる。また、過去形を非過去形へ置換した例「行くよ」は、家庭教師が B 児に「昨日も試

合観に行ったの？」と尋ねた後の発話である。昨日のことを尋ねられているので、「行ったよ」が自然だと思われる。

表 13 は SLI 児 2 例と定型発達児における時制標識の脱落及び置換の数と割合を示したものである。自然発話における動詞の時制の誤用は著しく少なく、A 児 18 個（非過去形を過去形への置換 4 個、過去形を非過去形への置換 14 個）、B 児 29 個（非過去形を過去形への置換 10 個、過去形を非過去形への置換 19 個）のみであった。この表から、SLI 児 2 例にみられた誤用は全て時制標識の置換であり、脱落の誤用は認められなかったことがわかる。また、2 例ともに、非過去形を過去形へ置換する誤用に比して過去形を非過去形へ置換する誤用が多い傾向にあることがわかる。一方、定型発達児 45 名における動詞の総使用数は 1512 であったが、時制の誤用は認められなかった。

次に、A 児の動詞における時制の誤用率を算出すると、収集開始期は 0.3% (2/731)、収集終了期は 0.5% (1/222) であった。B 児の時制の誤用率を算出すると、収集開始期は 0.3% (2/594)、収集終了期は 0.5% (2/431) であった。2 例ともに、収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に増加傾向がみられるものの、時制の誤用率は著しく低かった。2 例それぞれについて直接確率計算を行った結果、2 例ともに収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に有意差は認められなかった。

4. 考察

本項の検討の結果、SLI 児 2 例ともに自然発話における動詞の時制の誤用は著しく少なく、誤用は全て時制標識の置換であった。また、2 例ともに非過去形（ル形）を過去形（タ形）へ置換する誤用に比して過去形（タ形）を非過去形（ル形）へ置換する誤用が多い傾向にあった。一方、定型発達児 45 名には、時制の誤用は認められなかった。このように、SLI 児 2 例の自然発話においては時制の誤用は著しく少なかったものの、定型発達児においては時制の誤用は皆無であった。このことから、誤用率は低いですが、自然発話における時制の誤用が日本語を母語とする SLI 児の言語特徴の一つである可能性が示唆された。

次に、本項の結果を他の言語を母語とする SLI 児の知見と比較する。英語を母語とする SLI 児における時制の誤用は、時制を表す文法形態素の脱落を特徴としている (Gopnik, 1990; Rice et al., 1995)。また、英語の SLI 児の自然発話における過去時制・*ed* の平均誤用率は幼児期では 78% であり (Rice & Wexler, 1996)、学齢期においても約 15% であると報告されている (Rice et al., 1998)。一方、スペイン語を母語とする SLI 児の動詞の屈折の誤用は屈折接辞の置換を特徴としている (Bedore & Leonard, 2005)。また、自然発話における動詞の時制の誤用率は最も低い三人称単数過去形 (preterite) で 0.71%、最も高い三人称複数現在形で 9.43% であると報告されている (Bedore & Leonard, 2005)。このように、スペイン語を母語とする SLI 児の時制の誤用は、時制標識の置換を特徴としており、誤用率は英語の SLI 児に比して低い傾向にある。したがって、日本語を母語とする SLI 児の時制の誤用の特徴は、誤用のタイプが置換という点と英語の SLI 児よりも誤用率が低いという点でスペイン語の SLI 児の特徴と類似していることになる。スペイン語では、語幹のみの産出は許されない (Bedore & Leonard, 2001)。日本語の動詞も、語幹だけでは単語として成立しない (神尾, 1986)。一方、英語は語幹のみの産出を許す言語である。このことから、日本語の SLI 児の自然発話において、時制の誤用が著しく少なく、誤用はすべて時制標識の置換であったという結果には、日本語の動詞が語幹だけでは単語として成立しないことが影響していると考えられる。

最後に、非過去形 (ル形) を過去形 (タ形) へ置換する誤用に比して過去形 (タ形) を非過去形 (ル形) へ置換する誤用が多くみられた点について考察する。益岡・田窪 (1992) は、ル形を「基本形語尾」としている。このことから、誤用数は少ないものの、過去形が非過去形になるのは、「基本形語尾」へ誤ることによると推察される。しかし、誤用数が少ないことから、非過去形を過去形へ置換する誤用に比して過去形を非過去形へ置換する誤用が多くみられた点については、今後さらにデータを増やして検討する必要があると思われる。

なお、SLI 児 2 例ともに自然発話における時制の誤用率が収集開始期、終了期ともに著しく低かったため、開始期と終了期との間に明確な違いは認められなかった。

表 12 SLI 児 2 例における時制の誤用例

誤用のタイプ	誤用例
非過去形を過去形へ置換	7歳になりました (なります)* 見たことあるような気がしたなー (気がするなー)
過去形を非過去形へ置換	行くよ (行ったよ) なんかこの印刷気に入る (気に入った)

* 括弧内は正しいと思われる表現を指す.

表 13 SLI 児 2 例と定型発達児における時制標識の脱落及び置換の数と割合 (%)

	脱落	置換	
		非過去形を過去形へ	過去形を非過去形へ
A児	0 (0)	4 (22.2)	14 (77.8)
B児	0 (0)	10 (34.5)	19 (65.5)
定型発達児 (45 名)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

第2項 アスペクトの誤用の特徴と持続性

1. 目的

第2項では、アスペクトについて検討する。英語を母語とする SLI 児においては、アスペクトにかかわる形態素の脱落も SLI 児の言語特徴の一つとして知られている (Gopnik, 1990)。日本語を母語とする SLI 児においても、アスペクトに困難を示すことが実験課題を用いた検討から明らかになっている (Ito et al., 2011)。しかし、日本語を母語とする SLI 児の自然発話におけるアスペクトの誤用の特徴や持続性を詳しく検討したものはない。そこで本項では、SLI 児 2 例の自然発話におけるアスペクトの誤用の特徴と持続性を検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、第1節と同一の SLI 児 2 例と第2節第1項と同一の 2～6 歳の定型発達児 45 名 (2 歳児 7 名、3 歳児 9 名、4 歳児 11 名、5 歳児 12 名、6 歳児 6 名) であった。

2.2 手続き

SLI 児の発話は第1節と同様の方法で収集されたものであった。誤用の特徴については、対象とした全期間からアスペクトの誤用のみを抽出した。A 児に関しては、10 歳 0 カ月～20 歳 0 カ月までのデータを、B 児に関しては、6 歳 4 カ月～16 歳 4 カ月までのデータを分析した。定型発達児 45 名の自然発話は、第2節第1項と同一の自然発話データを分析した (総発話数 3865)。

誤用の持続性については、SLI 児 2 例の自然発話データのみを分析対象とした。A 児では、収集開始期として、生活年齢 10 歳 0 カ月～11 歳 1 カ月のデータ (総発話数 2376、総録音時間 552 分) と収集終了期として、生活年齢 17 歳 10 カ月～20 歳 0 カ月のデータ (総発話数 1332、総録音時間 512 分) を比較した。B 児では、収集開始期として、生活年齢 6

歳4カ月～7歳5カ月のデータ（総発話数1818、総録音時間463分）と収集終了期として、生活年齢14歳2カ月～16歳4カ月のデータ（総発話数2734、総録音時間470分）を比較した。

2.3 分析方法

日本語を母語とするSLI児を対象としてアスペクトについて検討した Ito et al. (2011) を参考に、寺村 (1984) の二次的アスペクトである、～テイル（縮約形テルも含む）、テアル、テシマウ（チャウも含む）を分析対象とした。なお、寺村 (1984) によれば、～テクル／テキタ、～テイク／テイツタにはアスペクトの働きをするものとそうでないものがある。そのため、本研究では、～テクル／テキタ、～テイク／テイツタは分析から除外した。また、解釈困難な発話に含まれるアスペクトは分析から除外した。

持続性については、分析対象とした収集開始期及び収集終了期の全自然発話を文字化し、誤用率を以下のように算出した。

$$\text{アスペクトの誤用率 (\%)} = \frac{\text{誤用数}}{\text{正用数} + \text{誤用数}} \times 100$$

誤用の同定には2名があたった。2名の評価者の同定が一致したもののみを分析対象とした。SLI児の自然発話における誤用の同定の一致度は92.1%であり、定型発達児は100.0%であった。

3. 結果

表14-1はA児におけるアスペクトの誤用をアスペクトの未使用（アスペクトを産出すべきところでアスペクトが産出されていない誤用）と不必要な使用（アスペクトを産出すべきではないところでアスペクトが産出されている誤用）に分けて示したものである。自

然発話におけるアスペクトの誤用は著しく少なく、誤用は 15 個のみであった。この表から、A児についてはアスペクトの未使用のほうがアスペクトの不必要な使用に比して多い傾向にあることがわかる。アスペクトの未使用の例「水曜以外の日に食べたの」は、A児が家庭教師の大学生に、幼稚園では水曜日以外の日は昼食をとってから帰っていたという過去の習慣について説明しているときの発話である。「食べたの」ではなく「食べていたの」のほうが自然だと思われる。また、アスペクトの不必要な使用の例「意味がないよとか言われてたよ」は、A児自身がクラスメイトに言われたことを指しているので、「言われてたよ」ではなく「言われたよ」のほうが自然だと思われる。

表 14-2 はB児におけるアスペクトの誤用をアスペクトの未使用と不必要な使用に分けて示したものである。B児においても、自然発話におけるアスペクトの誤用は著しく少なく、誤用は 20 個のみであった。この表から、B児についてはアスペクトの未使用とアスペクトの不必要な使用が同程度みられたことがわかる。アスペクトの未使用の例「鍵がかかってねー」は、B児がアニメの話をしている場面である。主人公が家に入ろうとしたら鍵がかかっていたということが説明したいので、「かかってね」ではなく「かかっているね」のほうが自然だと思われる。また、アスペクトの不必要な使用の例「決まってる」は、係り決めが終わった直後の発話である。そのため、「決まってる」ではなく「決まった」のほうが自然だと思われる。一方、定型発達児 45 名におけるアスペクトの総使用数は 380 であったが、アスペクトの誤用は認められなかった。

次に、A児のアスペクトの誤用率を算出すると、収集開始期は 0.7% (2/277)、収集終了期は 0 % (0/290) であった。収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に減少傾向がみられるものの、アスペクトの誤用率は著しく低かった。一方、B児の誤用率を算出すると、収集開始期は 0 % (0/245)、収集終了期は 1.0% (4/416) であった。収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に増加傾向がみられるものの、アスペクトの誤用率は著しく低かった。2 例それぞれについて直接確率計算を行った結果、2 例ともに収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に有意差は認められなかった。

4. 考察

本項の検討の結果、SLI 児 2 例の自然発話におけるアスペクトの誤用は著しく少ないものの、アスペクトの未使用とアスペクトの不必要な使用が認められた。一方、定型発達児 45 名には、アスペクトの誤用は認められなかった。この結果から、日本語を母語とする SLI 児は自然発話においても、アスペクトの使用に困難さを示すと推察された。このことは、SLI 児がアスペクトの使用に困難を示すと指摘した従来の知見 (Gopnik, 1990; Fletcher, Leonard, Stokes, & Wong, 2005; Ito et al., 2011; Leonard et al., 2012) を支持するものであり、SLI 児はアスペクトに関する言語知識を定型発達児ほど十分には獲得していない可能性が考えられた。

英語を母語とする SLI 児のアスペクトの誤用、特に進行を表すアスペクトについては、*-ing* の脱落または *be* 動詞の脱落の誤用がみられることが報告されている (Gopnik, 1990)。英語と日本語では、アスペクトの標示の仕方が異なるため、誤用の特徴を直接比較することは難しいと思われる。一方、誤用率については、*-ing* のみに限っていえば、Rice and Wexler (1996) が報告した英語の SLI 児の自然発話における *-ing* の誤用率 8% に比して、本研究の SLI 児のアスペクトの誤用率 (A 児の収集開始期 0.7%、終了期 0%、B 児の収集開始期 0%、終了期 1.0%) は低い傾向にあるといえる。ではなぜ、日本語を母語とする SLI 児のアスペクトの誤用率は英語の SLI 児の誤用率に比して低い傾向を示したのだろうか。日本語のアスペクトは時制と同様に動詞の語幹に接続する要素の一つである。また、本研究で分析対象としたアスペクトのテイル形は、その中に神尾 (1986) のいう接続助詞「て」を含んでいる。神尾 (1986) によれば、この「て」は単語内の要素であり、失文法者でも正しく使用されている。このことから、日本語の SLI 児においても、この「て」の誤用は生じにくいと予測される。したがって、アスペクトについても、時制の誤用と同様、日本語の動詞が語幹のみでは単語として成立しないことが影響している可能性がある。

なお、SLI 児 2 例ともに自然発話におけるアスペクトの誤用率が収集開始期、終了期とも著しく低かったため、開始期と終了期との間に明確な差は認められなかった。

表 14-1 A児におけるアスペクトの誤用

誤用のタイプ	
アスペクトの未使用	<p>水曜以外の日に食べたの (食べていたの)*</p> <p>ヤシチをや、ヤシキとか、勘違いする (勘違いしてた)</p> <p>その理由はねえ、牛乳の賞味期限がね過ぎちゃったん (過ぎちゃってたから) だよ</p> <p>ブルドックに似た (似てる) ような気がする</p> <p>いつもねえ、しょうぎみ期限過ぎてるぎゅう、牛乳飲んだ (飲んでる) からだよ</p> <p>いつから見た (見てた) ?</p> <p>36 歳から見た (見てた) ?</p> <p>36 歳のときから見た (見てた) ?</p> <p>上手くいった (上手くいってる) と思う</p> <p>似た (似てる) ような気がした</p> <p>これのね顔が気に入った (気に入ってる)</p>
アスペクトの不必要な使用	<p>意味がないよとか言われてた (言われた) よ</p> <p>休んでた (休んだ) ときの場合は</p> <p>コメント貰ってた (貰った) よ</p> <p>合唱コンも優勝できるって思ってた (思う)</p>

* 括弧内は正しいと思われる表現を指す.

表 14-2 B児におけるアスペクトの誤用

誤用のタイプ	
アスペクトの未使用	<p>鍵がかかってねー (かかっているねー)*</p> <p>よーく見て間違えたら (間違えてたら) また言ってね</p> <p>起きる (起きてる) わけないじゃん</p> <p>それはこの問題に出ます (出ています)</p> <p>〈サッカー選手の名前〉もこの問題に出ます (出ています)</p> <p>もう準備できない (まだ準備できてない) んだから、頼むよ</p> <p>黙って (黙ってて) 欲しいんだ、ちょっと</p> <p>これ今まるした (してある) んですよ</p> <p>ずーっと試合に出てる時に痛みは感じた (感じてた) からね</p>
アスペクトの不必要な使用	<p>決まってるー (決まった)</p> <p>先生は見ていました (先生を見ました)</p> <p>〈テレビドラマのタイトル〉 見てる (見た) ?</p> <p>遅刻してる (遅刻した) でしょ?</p> <p>銀河鉄道のなんとか、書いていました (書きました)</p> <p>の夜を書いていました (書きました)</p> <p>ちゃんと寝てろー (寝ろー)</p> <p>ちゃんと目つぶってろー (目をつぶれー)</p> <p>してない (しない) でしょー</p> <p>話してる後 (話した後) に号泣を</p> <p>今シーズン色んな出来事があってます (ありました) から</p>

* 括弧内は正しいと思われる表現を指す。

第3項 受動文の誤用の特徴と持続性

1. 目的

第3項では、受動文について検討する。日本語を母語とする SLI 児が受動文の獲得に困難を示すことが指摘されている (Fukuda & Fukuda, 2001; Fukuda et al., 2011)。しかし、日本語を母語とする SLI 児の自然発話における受動文の誤用の特徴や持続性を詳しく検討したものはない。そこで本項では、SLI 児 2 例の自然発話における受動文の誤用の特徴と持続性を検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、第1節と同一の SLI 児 2 例と第2節第1項と同一の 2～6 歳の定型発達児 45 名 (2 歳児 7 名、3 歳児 9 名、4 歳児 11 名、5 歳児 12 名、6 歳児 6 名) であった。

2.2 手続き

SLI 児の発話は第1節と同様の方法で収集されたものであった。誤用の特徴については、対象とした全期間から受動文の誤用のみを抽出した。A 児に関しては、10 歳 0 カ月～20 歳 0 カ月までのデータを、B 児に関しては、6 歳 4 カ月～16 歳 4 カ月までのデータを分析した。定型発達児 45 名の自然発話は、第2節第1項と同一の自然発話データを分析した (総発話数 3865)。

誤用の持続性については、SLI 児 2 例の自然発話データのみを分析対象とした。A 児では、収集開始期として、生活年齢 10 歳 0 カ月～11 歳 1 カ月のデータ (総発話数 2376、総録音時間 552 分) と収集終了期として、生活年齢 17 歳 10 カ月～20 歳 0 カ月のデータ (総発話数 1332、総録音時間 512 分) を比較した。B 児では、収集開始期として、生活年齢 6 歳 4 カ月～7 歳 5 カ月のデータ (総発話数 1818、総録音時間 463 分) と収集終了期として、生活年齢 14 歳 2 カ月～16 歳 4 カ月のデータ (総発話数 2734、総録音時間 470 分) を比較

した。

2.3 分析方法

本項では、受動文を産出すべきところで能動文を産出する誤りに加え、能動文を産出すべきところで受動文が産出された誤り、動詞の受動形の誤りも受動文の誤用として分析した。なお、解釈困難な発話に含まれる受動文は分析から除外した。

持続性については、分析対象とした収集開始期及び収集終了期の全自然発話を文字化し、誤用率を以下のように算出した。

$$\text{受動文の誤用率 (\%)} = \frac{\text{誤用数}}{\text{正用数} + \text{誤用数}} \times 100$$

誤用の同定には2名が当たった。2名の評価者の同定が一致したもののみを分析対象とした。SLI 児の自然発話における誤用の同定の一致度は 90.5%であり、定型発達児は 100.0%であった。

3. 結果

表 15-1 はA児における受動文の誤用を、1) 受動文を産出すべきところで能動文を産出した誤用、2) 能動文を産出すべきところで受動文を産出した誤用、3) 動詞の受動形の誤用に分けて示したものである。自然発話における受動文の誤用は著しく少なく、誤用は 22 個のみであった。この表から、A児では、上記の 1) と 2) の誤用が同程度みられたことがわかる。受動文を能動文とする誤用の例「言ってた」は、A児自身が主語である文脈だったので、「言ってた」ではなく「言われた」が自然だと思われる。また、能動文を受動文とする誤用の例「蛾ってさあ、刺されない？」は「刺さない？」が自然だと思われる。動詞の受動形の誤用の例「切れられて」は電話を切られたことを言いたい場面であったので、

「切れられて」ではなく「切られて」が自然だと思われる。

表 15-2 はB児における受動文の誤用を、1) 受動文を産出すべきところで能動文を産出した誤用、2) 能動文を産出すべきところで受動文を産出した誤用、3) 動詞の受動形の誤用に分けて示したものである。B児においても、自然発話における受動文の誤用は著しく少なく、誤用は16個のみであった。この表から、B児では、2) 能動文を受動文とする誤用が多い傾向にあることがわかる。受動文を能動文とする誤用の例「10月20日に解任してしまった」は、サッカークラブの監督が主語となっている文脈だったので、「解任してしまった」ではなく「解任されてしまった」が自然だと思われる。また、能動文を受動文とする誤用の例「落ちちゃうと燃やされちゃう」はストーブが落ちたら燃えると言いたい場面であったので、「燃やされちゃう」ではなく「燃えちゃう」が自然だと思われた。動詞の受動形の誤用は、タヌキにお墓を荒らされたことを筆者に説明している場面である。「荒らされた」が正しく産出されないままであった。

一方、定型発達児45名における受動文の総使用数は10であったが、誤用は認められなかった。

次に、A児の受動文の誤用率を算出すると、収集開始期は10.5% (2/19)、収集終了期は0% (0/35) であり、収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に減少傾向がみられた。B児の受動文の誤用率を算出すると、収集開始期は0% (0/2)、収集終了期は8.0% (4/50) であった。収集開始期の誤用率と終了期の誤用率との間に増加傾向がみられた。2例それぞれについて、直接確率計算を行った結果、2例ともに収集開始期の誤用率と終了期の誤用率の間に有意差は認められなかった。

4. 考察

本項の検討の結果、受動文の誤用は著しく少ないものの、SLI児2例の自然発話には1) 受動文を能動文とする誤用、2) 能動文を受動文とする誤用、3) 動詞の受動形の誤りが認められた。一方、定型発達児45名には、受動文の使用が10個しか認められず、誤用は認

められなかった。この結果から、日本語を母語とする SLI 児は自然発話においても、受動文の使用に困難さを示すと推察された。このことは、SLI 児の受動文の困難さを示唆した従来の知見 (Fukuda & Fukuda, 2001; Fukuda et al., 2011) を支持するものであり、SLI 児は受動文に関する言語知識を定型発達児ほど十分には獲得していない可能性が考えられた。

SLI 児にみられた受動文の誤用は、1) 受動文を能動文とする誤用、2) 能動文を受動文とする誤用、3) 動詞の受動形の誤りに分類された。今回のデータでは、定型発達児には受動文の誤用は認められなかったが、従来の言語発達研究では、幼児には上記の 1) や 3) の誤用がみられることが報告されている (伊藤, 1990; 大久保, 1977)。データ数が少ないことから、2) の誤用 (能動文を受動文とする誤用) が SLI 児の特徴であるかどうかも含め、SLI 児の受動文の誤用の特徴については、今後さらに検討される必要がある。

A児の収集開始期の誤用率 10.5%とB児の終了期の誤用率 8.0%は、2 例の時制 (0.3~0.5%)、アスペクトの誤用率 (0~1.0%) に比して高い傾向にあった。これはなぜだろうか。

益岡・田窪 (1992) によれば、受動表現は態 (ヴォイス) の代表的な表現である。態とは、接辞の付加に伴って補足語の格が規則的に変更する現象に関わる文法形式のことであり、受動表現においては、受動を表す接辞 ‘(r)areru’ が付くと、補足語の格が規則的に別の格に変わる。例えば、「子どもを叱る」におけるヲ格は、述語に受動の接辞が付くと、「子どもが叱られる」のようにガ格に変わる。このように、受動文を産出するためには、接辞の付加のみならず格の変更が必要となる。このことが、その他の動詞の語幹に接続する要素である時制やアスペクトの誤用率に比して、受動文の誤用率が高い傾向にあった理由の一つとして考えられる。

なお、SLI 児 2 例ともに自然発話における受動文の使用自体が少なく、収集開始期、終了期ともに誤用率が著しく低かったため、開始期と終了期との間に明確な差はみられなかった。

表 15-1 A児における受動文の誤用

誤用のタイプ	
受動文を能動文	<p>けっこうかわいいなあって、なん、言ってた (言われた)*</p> <p>ケニアに帰れとかね、いじめてん (いじめられてん) だよ</p> <p>でもシロを飼っちゃいけませんって言ってた (言われた) からなんだよ</p> <p>どらえものの道具をいたずらしてばかり (されてばかり)</p> <p>この人ねえ落書きした (落書きされた) 時に鼻水と涙が出たん</p> <p>俺に聞いても (聞かれても) 知らないぞ</p> <p>あー俺、キスしなくて (されなくて) よかったー</p> <p>タヌキって言い返した (言い返された) 後に、ポンタって言えばいいんだ</p> <p>〈クラスメイトの名前〉ねえ、ケニアに帰れって言う (言われる) んだよ</p>
能動文を受動文	<p>蛾ってさあ、刺されない? (刺さない?)</p> <p>キモリはねえ、すぐ、なぐ、なぐ、なぐさしられる人 (なぐる人)</p> <p>妖精学校のしから、しかられ先生 (しかる先生)</p> <p>おばちゃん先生、おこ、おこり、おこ、しかられ先生 (しかる先生)</p> <p>うるさいんだよーって怒られてる (怒っている) よ</p> <p>もてもてにされる (もてもてになる) のがヤダとか</p> <p>サクラはね、いつもあしでまといにされちゃって (なっちゃって)</p> <p>コノハマルにね、心配かけられちゃう (かけちゃう) よ</p> <p>余計なことね、サクラちゃんにね言われちゃった (言っちゃった) から</p> <p>うちのこと、タヌキとか呼ばれた (呼ぶ) んだけど</p>
動詞の受動形の誤用	<p>それでね一回切れられて (切られて)</p> <p>よろこば、よろこんでさ、よろこびされてしもうた (よろこばれた)</p> <p>糸でしめつけされてる (しめつけられてる) だよねー</p>

* 括弧内は正しいと思われる表現を指す。

表 15-2 B児における受動文の誤用

誤用のタイプ	
受動文を能動文	<p>10月20日に解任してしまった(されてしまった)*</p> <p>今度から気をつけないとって言ったら(言われて)逃げた</p> <p>食べられる、うめ、つかまって埋める(埋められる)</p> <p>上を見ろ、って言ったら(言われて)ねー、木の上見たらいたんだよ</p> <p>あっ、参考書にしたくない(されたくない)からねー</p>
能動文を受動文	<p>落ちちゃうと燃やされちゃう(燃えちゃう)</p> <p>子どもがねお兄ちゃんて言わ、れて(言って)誘ってくるんだもーん</p> <p>変な人が誘われてきたら(誘ってきたら)、防犯ブザーを鳴らすでしょ</p> <p>刺されてくる(刺してくる)虫はあります、蚊です</p> <p>とじこまれてねー(とじこもってねー)</p> <p>星へ帰れとか言われた(言う)</p> <p>その人の美術館が開こう、開館されました(開館しました)</p> <p>ユーチューブにいる、うん、流出されている(流出している)から</p> <p>まあ最後のPK戦でチキンにされて(なって)しまいましたね</p> <p>石橋に受けられた(受けた)んだよ</p>
動詞の受動形の誤用	<p>あーなんか、あらず、あら、何だっけ、あらって、荒れたやつがね、生では見たことないけど、荒れた跡、荒れたやつはねーあったねー</p>

* 括弧内は正しいと思われる表現を指す。

第3章

SLI 児多数例を対象とした横断研究

第1節 実験課題と自然発話における格助詞の誤用の比較

1. 目的

第2章におけるSLI児2例の自然発話の分析から、日本語を母語とするSLI児の自然発話においては格助詞の誤用の割合が高いことが示され、さらに、格助詞の誤用は減少するものの困難さは持続している可能性が示唆された。

SLI児の実験課題における時制の誤用率が自然発話における誤用率に比して高いことが指摘されている(Hansson & Leonard, 2003; Oetting & Horohov, 1997)。日本語のSLI児においては、Ito et al. (2011) がアスペクトに視点を当て、自然発話における誤用率が実験課題における誤用率に比して著しく低いことを報告している。しかし、縦断研究で対象としたSLI児2例の自然発話データにおいて誤用が多く、困難さが持続している可能性が示唆された格助詞については不明である。また、日本語を母語とするSLI児の格助詞に関する従来知見は、少数例を対象としたものがほとんどである(福田ら, 2007; Ito et al., 2009)。

以上を踏まえ、本節では、まず、1) SLI児の実験課題と自然発話における格助詞の誤用率にはどのような差がみられるのかを検討し、次に、2) 格助詞挿入課題における成績を、SLI児と定型発達児とで比較することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、ことばの教室に通う児童7例(2年生2名、3年生3名、4年生1名、5年生1名)であった。この7例は、言語発達遅滞を主訴としてことばの教室に通い、かつSLIの基準(Leonard, 2014)を満たしていたため、SLIであると推測された。表16にデータ収集期間、総録音時間及び分析対象総発話数を示した。なお、総録音時間は実際に録音した時間から分析対象外の場面の録音を除いたものである。この7例のデータ収集については、ことばの教室の担当教員及び対象児の保護者に研究の目的、方法、個人情報の取り扱い

いなどについて口頭及び文書で説明を行い、同意を得て実施した。

また、実験課題では、小学3年生の児童29名も対象とした。この29名は、担当教員が言語、認知、社会性において著しい発達の障害がないと判断している児童であった。この29名のデータ収集についても、児童が在籍する小学校の校長及び担当教員に本研究の目的、方法、個人情報の取り扱いなどについて口頭及び文書で説明を行い、同意を得て実施した。

2.2 刺激文

福田ら(2007)を参考にして作成した格助詞挿入課題を実施した。この課題は、線画と刺激文の内容が一致するように括弧の中(2箇所)に「が」「を」「に」のいずれかを挿入するものであった。刺激文は、能動・基本語順文、能動・非基本語順文、受動・基本語順文、受動・非基本語順文が各4文、計16文であった。用いた動詞は、「なでた」「たたいた」「おした」「おいかけた」であった。文字提示される刺激文を表17に示し、刺激として提示される線画の例を図1に示した。

2.3 手続き

SLI児7例の自然発話は、通級指導教室における担任または筆者との自由会話をICレコーダー(ICD-SX734, SONY)に録音したものである。1回につき約1時間の録音を行った。d児のみ録音回数が1回であったが、その他6例については、2~3回の録音を行った。第2章と同様に、大久保(1973)を参考に、「文末とするところに動詞の終止形とか終助詞があり、いくらかの間が認められたり、イントネーションもさがっており、(疑問形式はあがる。)声も消えかかっている」ものを一発話とし、ことばに関する課題場面での発話、不明瞭な発話は分析から除外した。

SLI児については、実験は個別に行った。同じ種類の文が続かないよう刺激文をランダムに配列したプリントを冊子状にし、配布した。まず、対象児に最初のページに書かれている文(絵をみて、文を完成させましょう。ただし括弧の中には「は」を入れてはいけま

せん)を音読させた。次に、対象児が課題の手順を理解していることを確認するために、最初のページに書かれている練習問題を2問行った。読み誤りによる誤答を防ぐため、刺激文は声に出して読むように指示し、誤った場合は訂正を求めた。「が」「を」「に」について分析するために、「は」は使用しないこと、分からないときは「？」を記入することを検査者が説明した。対象児が誤って「は」を使用した場合は、「は」が使用できないことをその都度説明した。対象児自身が終わったと判断した時点で検査を終了した。

一方、定型発達児29名については、実験課題は一斉実施で行った。まず、最初のページに書かれている文(絵をみて、文を完成させましょう。ただし、括弧の中には「は」を入れてはいけません)を検査者が読みあげ、次に、最初のページに書かれている練習問題を2問実施するよう指示し、全ての対象児が課題の手順を理解していることを確認した。本課題に入る前に、「は」は使用しないこと、分からないときは「？」を記入することを検査者が説明し、SLI児と同様に、対象児自身が終わったと判断した時点で検査を終了した。

2.4 分析方法

自然発話及び実験課題における、格助詞の誤用率を以下のように算出した。

$$\text{格助詞の誤用率 (\%)} = \frac{\text{誤用数}}{\text{正用数} + \text{誤用数}} \times 100$$

なお、自然発話における格助詞の誤用の同定には、2名があたった。2名ともに誤用と判断したもののみを分析対象とした。

3. 結果

図2は、SLI児の格助詞挿入課題と自然発話における格助詞の誤用率を示したものである。縦軸が格助詞の誤用率を、横軸が実験課題と自然発話を表している。自然発話におけ

る一人当たりの誤用数が著しく少なかったため、7例の合計の値を誤用数及び正用数として誤用率を算出した。格助詞挿入課題における誤用率は55.4%、自然発話における誤用率は1.5%であった。 χ^2 検定を行った結果、実験課題における誤用率と自然発話における誤用率との間に有意差が認められた ($\chi^2(1) = 655.03, p < .001$)。したがって、実験課題における格助詞の誤用率は自然発話における誤用率に比して高いといえる。

次に、SLI児の成績と定型発達児の成績との間に差がみられるのかどうかを明らかにするために、総刺激文数に占める誤用文数の割合を誤用率として、SLI児7例の格助詞挿入課題における誤用率と定型発達児29名の誤用率を比較した。なお、定型発達児29名中4名に「が」を産出すべきところで「は」または「わ」を産出した対象児がいたが、「が」とみなし、分析した。図3は格助詞挿入課題におけるSLI児と定型発達児の平均誤用率を示したものである。縦軸が平均誤用率を示し、横軸は対象児を示している。格助詞挿入課題におけるSLI児の誤用率は67.0% ($SD = 10.4$)、定型発達児の誤用率は17.5% ($SD = 12.2$)であった。 t 検定を行った結果、両条件の平均の差は有意であった (両側検定: $t(34) = 9.61, p < .01$)。したがって、格助詞挿入課題におけるSLI児の誤用率は定型発達児の誤用率に比して有意に高いといえる。

4. 考察

本節の結果、日本語を母語とするSLI児は、実験課題における格助詞の誤用率が自然発話における誤用率に比して有意に高いことが明らかになった。この結果は、自然発話と実験課題の成績には乖離がみられることを指摘した従来知見 (Hansson & Leonard, 2003; Ito et al., 2011; Oetting & Horohov, 1997) を支持するものである。また、格助詞挿入課題におけるSLI児の誤用率は定型発達児の誤用率に比して有意に高かった。これらの結果から、日本語を母語とするSLI児の言語の問題を捉えるためには、自然発話のみならず、実験課題を用いた検討も必要であることが示唆された。

では、実験課題における格助詞の誤用率が自然発話における誤用率に比して著しく高か

ったのはなぜだろうか。Hansson and Leonard (2003) は、スウェーデン語を母語とする SLI 児を対象として、自然発話における動詞の規則形過去の誤用率が実験課題を用いた場合よりも著しく低いことを明らかにした。この理由として、実験課題においては動詞を自由に選択できないことを指摘している。今回の実験課題における格助詞は、動詞によって決定されるものである。実験課題では既に動詞が与えられているので、スウェーデン語の場合と同様、SLI 児は動詞を自由に選択できず、自分が使いこなせる表現を用いることができなかつたため、実験課題における誤用率が高くなつたと思われる。

表 16 データ収集期間、総録音時間及び分析対象総発話数

対象児	データ収集期間	総録音時間 (分)	分析対象総発話数
a 児	7;7-7;7	189	562
b 児	8;0-8;2	158	601
c 児	8;7-8;8	117	220
d 児	8;10-8;10	35	179
e 児	9;7-9;9	61	394
f 児	10;2-10;3	163	551
g 児	10;7-10;7	128	674

表 17 文字提示される刺激文

<p>能動文 (基本語順)</p>	<p>はなこさん (が)* たくやさん (を) なでた。 さとるさん (が) ひろみさん (を) たたいた。 かずおさん (が) しずかさん (を) おした。 たろうさん (が) よしこさん (を) おいかけた。</p>
<p>能動文 (非基本語順)</p>	<p>たくやさん (を) はなこさん (が) なでた。 ひろみさん (を) さとるさん (が) たたいた。 しずかさん (を) かずおさん (が) おした。 よしこさん (を) たろうさん (が) おいかけた。</p>
<p>受動文 (基本語順)</p>	<p>はなこさん (が) たくやさん (に) なでられた。 さとるさん (が) ひろみさん (に) たたかれた。 かずおさん (が) しずかさん (に) おされた。 たろうさん (が) よしこさん (に) おいかけられた。</p>
<p>受動文 (非基本語順)</p>	<p>たくやさん (に) はなこさん (が) なでられた。 ひろみさん (に) さとるさん (が) たたかれた。 しずかさん (に) かずおさん (が) おされた。 よしこさん (に) たろうさん (が) おいかけられた。</p>

* 括弧内が空欄で提示されている。

かずおさん（ ） しずかさん（ ） おした。

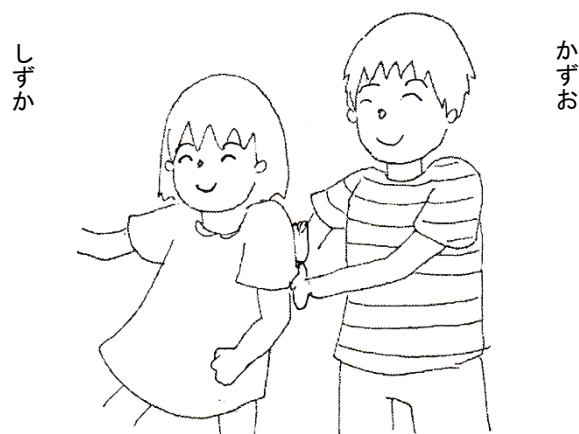


図1 能動・基本語順の刺激文と線画の例

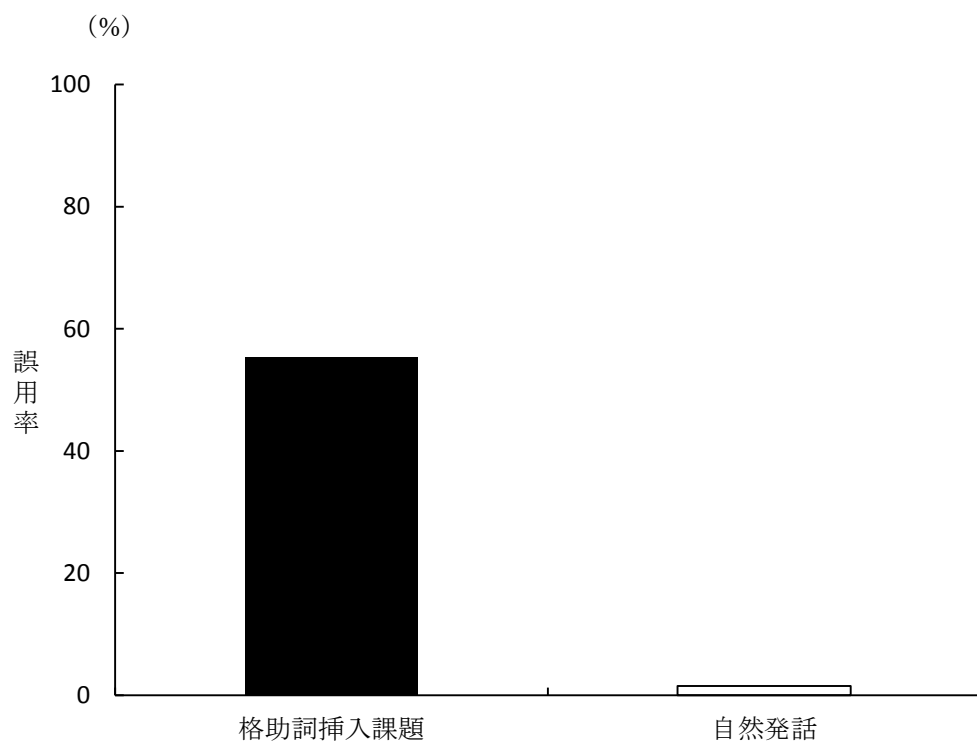


図2 SLI児の格助詞挿入課題と自然発話における格助詞の誤用率

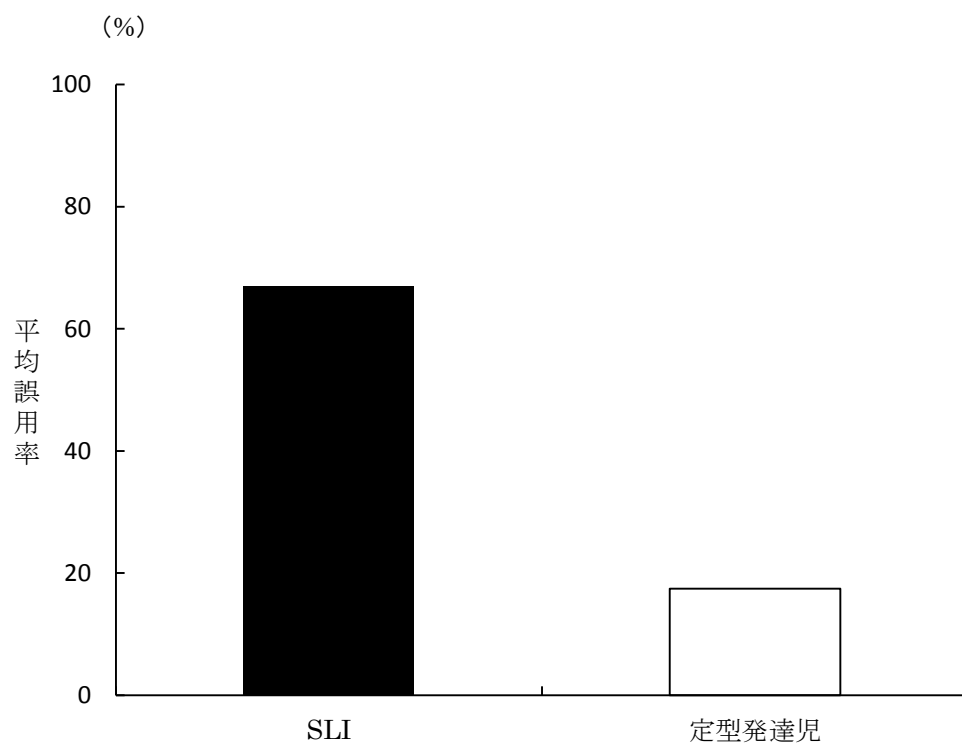


図3 格助詞挿入課題におけるSLI児と定型発達児の平均誤用率

第2節 実験課題における格助詞の誤用に及ぼす語順、態の影響

1. 目的

第1節の結果、SLI児は実験課題を用いると格助詞の誤用率が自然発話に比して著しく高くなることが明らかになった。第1節の実験課題では受動文、非基本語順文を刺激文として用いており、それらが格助詞の成績へ影響していると考えられた。事実、福田ら(2007)は、SLI児の格助詞挿入課題の成績は、能動文か受動文かの違い(態)の影響よりも、基本語順か非基本語順か(語順)の影響を強く受けると述べている。しかし、福田ら(2007)では、対象児が3例のみであり、指摘の妥当性を検討するにはより多くのSLI児を対象とする必要がある。そこで本節では、対象児及び刺激文の数を前節より増やし、SLI児の格助詞挿入課題における成績に及ぼす語順と態の影響を検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象児

対象児は、ことばの教室に通う児童12例(2年生1例、3年生2例、4年生7例、5年生2例)であった。この12例は、言語発達遅滞を主訴としてことばの教室に通い、かつ Talla et al. (1991) の SLI の除外式診断基準(表2)を満たしていたため、SLIであると推測された。

12例のデータ収集については、ことばの教室の担当教員に研究の目的、方法、個人情報の取り扱いなどについて口頭及び文書で説明を行い、同意を得て実施した。

2.2 刺激文

福田ら(2007)を参考にして作成した格助詞挿入課題を実施した。この課題は、線画と刺激文の内容が一致するように括弧の中(2箇所または3箇所)に「が」「を」「に」のいずれかを挿入するものであった。刺激文は、能動・基本語順文、能動・非基本語順文、受動・基本語順文、受動・非基本語順文が各6文、計24文であった。能動文で用いた動詞

は「たたいた」「追いかけた」「押した」であり、受動文で用いた動詞は「たたかれた」「押された」「引っ張られた」であった。文字提示される刺激文を表 18 に示した。

2.3 手続き

実験は個別に行った。同じ種類の文が続かないよう刺激文をランダムに配列したプリントを冊子状にし、配布した。最初に、対象児が課題の手順を理解していることを確認するために、最初のページに書かれている練習問題を 2 問行った。読み誤りによる誤答を防ぐため、刺激文は声に出して読むように指示し、誤った場合は訂正を求めた。「が」「を」「に」について分析するために、「は」「も」「の」「と」は使用しないこと、分からないときは「？」を記入することを事前に説明した。対象児が誤って「は」「も」「の」「と」を使用した場合は、これらの助詞が使用できないことをその都度説明した。対象児自身が終わったと判断した時点で検査を終了した。

2.4 分析方法

刺激文中の格助詞がすべて正答の場合のみ、その刺激文を正答とした。

3. 結果

図 4 は、格助詞挿入課題における基本語順文と非基本語順文の平均正答数を示したものである。縦軸は平均正答数を、横軸は刺激文の種類を表している。この図から、基本語順文についてみると、能動文の正答数が受動文に比して多い傾向にあることがわかる。非基本語順文においても、同様の傾向が認められるものの、能動文と受動文との差は基本語順文に比して小さい傾向にあることがわかる。2 (能動文、受動文)×2 (基本語順文、非基本語順文) の 2 要因の分散分析の結果、語順の主効果のみ有意であった ($F(1,11) = 17.82, p < .01$)。交互作用は認められなかった。

4. 考察

本節の検討の結果、SLI 児 12 例の格助詞挿入課題の成績は、語順の影響を強く受けることが明らかとなった。既に述べたように、福田ら (2007) は、SLI 児の格助詞挿入課題の成績は、能動文か受動文かの違いの影響よりも、語順の影響を強く受けると指摘している。本研究の結果は、福田ら (2007) の知見を支持するものであった。Hansson and Nettelbladt (1995) は、スウェーデン語を母語とする SLI 児が使用する語順のパターンは定型発達児に比して制限があることを示し、SLI 児は語順に問題を示すと述べた。また、Friedmann and Novogrodsky (2004) はヘブライ語を母語とする SLI 児を対象として関係節の理解の獲得について検討し、SLI 児が非基本語順の文に選択的な障害を示すことを示した。本研究の結果は、これらの知見をも支持するものであったといえる。このことから、語順の影響を受けることも SLI 児の言語特徴の一つである可能性が考えられる。

ではなぜ、SLI 児は非基本語順文において特に困難さを示すのだろうか。福田ら (2007) は、対象とした SLI 児 3 名中 2 名の格助詞の誤用において、入力頻度がより高い基本語順における格配列順序に依存した傾向がみられたことを示した。福田ら (2007) は、この結果は、SLI 児の言語知識が言語入力における言語情報の形式の出現頻度に大きく影響を受けるといふ先行研究の報告と一致すると述べている。本研究においても、SLI 児は格に関する言語知識を十分に獲得できていないため、入力頻度の低いと予測される非基本語順文に困難さを示した可能性が考えられる。

表 18 文字提示される刺激文

能動文 (基本語順)	<p>えみちゃん (が)* たくやさん (を) たたいた。</p> <p>さとりさん (が) ひろみさん (を) たたいた。</p> <p>ひろみさん (が) さとりさん (を) 追いかけた。</p> <p>たくやさん (が) えみちゃん (を) 追いかけた。</p> <p>かずおさん (が) しずかさん (を) 押した。</p> <p>しずかさん (が) かずおさん (を) 押した。</p>
能動文 (非基本語順)	<p>ひろみさん (を) さとりさん (が) たたいた。</p> <p>たくやさん (を) えみちゃん (が) たたいた。</p> <p>さとりさん (を) ひろみさん (が) 追いかけた。</p> <p>えみちゃん (を) たくやさん (が) 追いかけた。</p> <p>しずかさん (を) かずおさん (が) 押した。</p> <p>かずおさん (を) しずかさん (が) 押した。</p>
受動文 (基本語順)	<p>えみちゃん (が) ひろみさん (に) 頭 (を) たたかれた。</p> <p>かずおさん (が) えみちゃん (に) 頭 (を) たたかれた。</p> <p>しずかさん (が) かずおさん (に) 腕 (を) 引っ張られた。</p> <p>たくやさん (が) しずかさん (に) 腕 (を) 引っ張られた。</p> <p>さとりさん (が) たくやさん (に) 背中 (を) 押された。</p> <p>ひろみさん (が) さとりさん (に) 背中 (を) 押された。</p>
受動文 (非基本語順)	<p>えみちゃん (に) かずおさん (が) 頭 (を) たたかれた。</p> <p>ひろみさん (に) えみちゃん (が) 頭 (を) たたかれた。</p> <p>かずおさん (に) しずかさん (が) 腕 (を) 引っ張られた。</p> <p>しずかさん (に) たくやさん (が) 腕 (を) 引っ張られた。</p> <p>さとりさん (に) ひろみさん (が) 背中 (を) 押された。</p> <p>たくやさん (に) さとりさん (が) 背中 (を) 押された。</p>

* 括弧内が空欄で提示される。

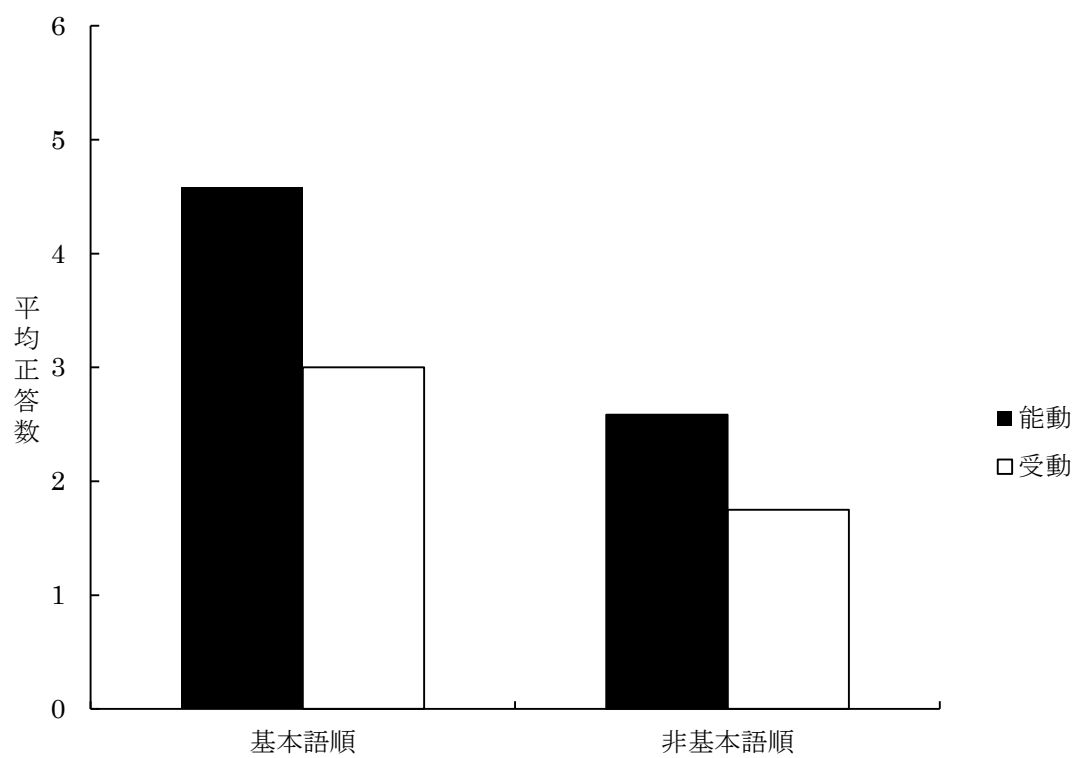


図4 格助詞挿入課題における基本語順文と非基本語順文の平均正答数

第4章

総合考察

第1節 日本語を母語とする SLI 児の言語特徴

日本語を母語とする SLI 児に関する研究はいくつかあるが (Fukuda & Fukuda, 1999; Fukuda & Fukuda, 2001; 福田ら, 2007; Ito et al., 2009, 2011; Ito et al., 2008; 大伴, 2004; 田中, 2003; 田中ら, 2001)、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴に対する明示的な提案はなされていない。ここでは、本研究の結果から、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴に対する提案を行う。

本研究の結果は以下のとおりであった。日本語の SLI 児の自然発話においては、形態論的・統語論的誤用の割合が高く、その中では格助詞の誤用の割合が高いことが明らかになった (第2章第1節)。構造格の格助詞の位置での誤用が内在格の格助詞の位置での誤用に比して有意に多かった (第2章第2節第1項)。また、SLI 児2例の約10年にわたる縦断研究の結果、自然発話における格助詞の誤用は減少するものの、困難さは持続する可能性が示唆された (第2章第2節第2項)。一方、SLI 児2例の自然発話における時制、アスペクト、受動文の誤用は著しく少なく、収集開始期と終了期の間に明確な差は認められなかった (第2章第3節)。この結果を受けて、格助詞に視点を当て、多数例を対象とした実験的検討を行った。その結果、自然発話における格助詞の誤用率は実験課題の誤用率に比して著しく低いことが明らかになった (第3章第1節)。

以上の結果から、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴として、以下の5点を提案する。

- 1) 形態論的・統語論的側面の困難さをもつ
- 2) 形態論的・統語論的側面の中では格助詞の使用が最も困難である
- 3) 構造格の格助詞の使用のほうが内在格の格助詞の使用よりも困難である
- 4) 格助詞の使用の困難さは持続する
- 5) 自然発話における格助詞の誤用率は実験課題の誤用率に比して著しく低い

以下では本研究で提案した日本語を母語とする SLI 児の言語特徴 1)~5) について考察する。まず、1) について考察する。SLI 児が形態論的・統語論的側面に問題を示すことは従来から指摘されている (Gopnik, 1994; Rice et al., 1995; van der Lely, 1994)。1) の知見

は、日本語を母語とする SLI 児も同様の問題をもつことを示唆している。欧米の言語と著しい違いをもつ日本語を母語とする SLI 児も形態論的・統語論的側面に困難さをもつという結果は、形態論的・統語論的側面の困難さは、SLI 児の普遍的な言語特徴の一つであることを示していると思われる。

次に、上記 2)、すなわち、日本語を母語とする SLI 児の自然発話においては、形態論的・統語論的誤用の中で、特に格助詞の誤用が多くみられたことについて、神尾 (1986) の失文法の知見を用いて考察を試みる。SLI にみられる文法障害は、ブローカー失語にみられる成人の失文法とよく似ていることが指摘されている (福田, 2014)。失文法に関する従来の知見によれば、英語では、動詞の三人称単数現在の標識 *-s*、所有格の標識 *'s*、などが脱落する例がしばしば観察される。神尾 (1986) は、対象とした 2 名の失文法者が用言の活用形をすべて正しく用いていたことに着目した。この視点を本研究で得られた日本語を母語とする SLI 児の言語特徴に当てはめてみたい。格助詞と時制、アスペクトを比較すると、格助詞とは異なり、時制やアスペクトは活用語尾を構成する一部分となる形式である。したがって、神尾 (1986) において失文法者にみられた特徴が SLI 児にも当てはまるとすると、活用語尾の一部分となる形式である時制、アスペクトは正しく保たれると予測される。本研究では、誤りは皆無ではなかったが、時制、アスペクトの誤用は格助詞に比して著しく少なかった。この結果は、神尾 (1986) における失文法者の特徴とほぼ一致しているといえる。そのため、本研究において時制、アスペクトの誤用が格助詞の誤用に比して著しく少なかったのは、時制やアスペクトは活用語尾を構成する一部分となる形式であることによると考えられる。

次に、3) について考察する。本研究の結果、2 例ともに構造格の格助詞の位置での誤用が内在格の格助詞の位置での誤用に比して有意に多かったという点では定型発達児 (幼児) の結果と一致していた。一方、構造格の格助詞の位置での誤用において、定型発達児では、誤用 3 個中 2 個が他の構造格の格助詞への誤用であったのに対し、SLI 児では、他の構造格の格助詞への誤用と内在格の格助詞への誤用とが同程度みられた。これらの結果

から、SLI 児は構造に基づく格付与の知識が定型発達児に比して不完全であり、SLI 児は構造格と内在格の違いに関する知識を定型発達児ほど十分には獲得していない可能性が示唆された。

次に、SLI 児の構造格の格標識の誤用についての従来知見と本研究の結果を比較する。まず、ドイツ語の結果と比較する。Clahsen (1989, 1991) はドイツ語を母語とする SLI 児の発話の特徴の一つとして、対格や与格の格標識の誤用がみられることを挙げている。Eisenbeiss, Bartke, and Clahsen (2005) は構造格と内在格という枠組みを用いてドイツ語を母語とする SLI 児の格標識について検討した。Eisenbeiss et al. (2005) によれば、構造格は特定の構造の位置に付与されるのに対し、内在格は特定の語彙項目の指定に基づいて、または特定の主題役割 (動作主、対象、起点、着点、場所など) との関係によって付与される格のことである。Eisenbeiss et al. (2005) の検討の結果、ドイツ語を母語とする SLI 児の自然発話では、1) 構造格の格標識の誤用率に比して内在格の誤用率が有意に高く、2) 内在格の格標識の誤用の多くが構造格の格標識への誤用であった。また、3) 上記の 1)、2) の結果において SLI 児と定型発達児は類似していた。これらの結果から、Eisenbeiss et al. (2005) は、SLI 児は格標示に障害を受けていないとした。本研究の結果では、構造格の格助詞の誤用率は内在格の格助詞の誤用率に比して高く、Eisenbeiss et al. (2005) の 1) の結果と異なっていた。また、本研究においては、構造格の格助詞の誤用では、他の構造格の格助詞への置換と内在格の格助詞への置換との間に差がみられなかった。この点で Eisenbeiss et al. (2005) の 2) の結果と異なっていた。3) については、本研究で対象とした定型発達児の誤用数は非常に少なかったが、SLI 児と定型発達児との間に違いがみられる可能性が示唆されており、この点においても Eisenbeiss et al. (2005) の結果と異なっている。

次に、日本語と同じ膠着言語に分類される、ハンガリー語、フィンランド語、トルコ語の知見と本研究の結果を比較する。ハンガリー語は、名詞の語幹に接尾辞を付加することによって格を表し、その接尾辞は格しか示さないため、SLI 児が格標示に問題を持つかどうか

かを検討することを可能にするといわれている (Lukács, Leonard, & Kas, 2010)。Lukács et al. (2013) は、ハンガリー語を母語とする SLI 児は構造格の格標示に問題を示さないと述べている。このことは、構造格の格助詞の位置での誤用が多かった本研究の結果と異なっている。

一方、ハンガリー語と同様に、名詞の語幹に接尾辞を付加することによって格を表すフィンランド語においては、SLI 児は対格の標識の使用に困難さを示すと報告されている (Leonard et al., 2014)。この結果は、本研究の結果と部分的に一致しているといえる。また、トルコ語も名詞の語幹に接尾辞を付加することによって格を表す言語である。Rothweiler, Chilla, and Babur (2010) は、トルコ語とドイツ語のバイリンガル (Turkish-German successive bilingual) の SLI 児の自然発話においても、構造格の格標識の誤用が定型発達児に比して多くみられることを示し、構造格の格標識の誤用はトルコ語の SLI 児の臨床的指標になる可能性があると述べている。

このように、SLI 児が構造格の格標識の誤用を示すかどうかについては、異なる結果が得られている。ドイツ語 (Eisenbeiss et al., 2005)、ハンガリー語の知見では、構造格の格標識の使用に困難さは示さないという結果であり、フィンランド語、トルコ語、ドイツ語の知見 (Clahsen, 1989, 1991) は構造格の格標識に困難さを示すという結果であった。

ドイツ語は屈折言語であり、ハンガリー語、フィンランド語、トルコ語、日本語は膠着言語である。屈折言語であるドイツ語については、構造格の格標識に問題を示すという報告と示さないという報告がある。また、膠着言語の中には、構造格の格標識に問題を示す言語と示さない言語があったことから、SLI 児が構造格の格標識の使用に問題を示すかどうかは屈折言語と膠着言語による違いでは説明できない。SLI 児が構造格の格標識に問題を示すかどうかと、言語の類型論的な違いが関係するかどうかについては、今後さらに検討される必要があると思われる。

次に、構造格の格標識の誤用について、デフォルトの格への誤用という視点から考察する。英語を母語とする SLI 児においては、主格を対格へ置換する誤用がみられること

が指摘されている (Loeb & Leonard, 1991; Wexler et al., 1998)。また、ドイツ語を母語とする SLI 児においては、対格や与格を主格へ置換する誤用がみられることが報告されている (Clahsen, 1991)。英語では対格がデフォルトの格であり、ドイツ語では主格がデフォルトの格であるといわれている。このように、英語、ドイツ語を母語とする SLI 児にみられる格標示の誤用は、その言語におけるデフォルトの格への置換であるという特徴を持つことが指摘されている (Lukács et al., 2013)。本研究の縦断研究で対象とした 2 例についてみると、構造格の格助詞の位置での誤用において、2 例に共通して多くみられた誤りは、対格「を」を主格「が」へ置換する誤用であった。三原 (1994) によれば、Fukui and Nishigauchi (1992) は日本語のデフォルトの格が「が」である可能性を指摘している。もし、日本語のデフォルトの格が主格「が」であるとすれば、「が」への置換が多いと予測される。しかし、本研究の縦断研究で対象とした SLI 児 2 例の自然発話における構造格の格助詞の位置での誤用について詳しくみると、A 児には、「が」へ置換する誤用が 9 個観察されたが、「が」以外へ置換する誤用は 24 個観察されている (表 9)。また、B 児についても、「が」へ置換する誤用が 10 個観察されたが、「が」以外へ置換する誤用は 27 個観察されている (表 10)。したがって、英語、ドイツ語とは異なり、日本語の SLI 児の格助詞の誤用はデフォルトへの誤用であると説明することは難しいと思われる。

次に、上記 4) について考察する。SLI の言語の困難さは持続することが従来から指摘されている (Leonard, 1998, 2014)。幼児期や学齢期に SLI の同定で用いられる臨床的指標は、青年期、さらには成人期においても、SLI の有効な指標となり得る可能性が指摘されている (Poll et al., 2010; Rice et al., 2009)。このことは、臨床的指標になる主たる言語特徴は青年期、成人期においても持続することを示している。したがって、上記 4) は、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴の中核が格助詞の誤用であることを示している。

最後に、5) について考察する。自然発話における格助詞の誤用率 1.5%は実験課題における誤用率 55.4%に比して著しく低かった (第 3 章第 1 節)。本研究の自然発話における誤

用率はいずれも従来の実験的研究によって示されている誤用率 (Fukuda & Fukuda, 1999; Ito et al., 2009, 2011; Ito et al., 2008) に比して著しく低い。このように、自然発話データの誤用率と実験課題データの誤用率の間の乖離は、格助詞のみならず、時制、アスペクト、受動文の誤用にも当てはまる。

以下ではこの理由について考察する。Paradis and Gopnik (1997) は、SLI 児は形態論などの無意識的な言語能力の獲得が困難なため、意識的な知識を用いてその文法的な困難さを補うと指摘している。また、コミュニケーション場面では、意識的に記憶した形式を当てはめることができるのに対し、検査場面では、SLI 児はメタ言語知識を適用することなどが困難であると指摘している (Paradis & Gopnik, 1997)。この指摘を踏まえると、日本語を母語とする SLI 児においても、自然発話場面においては、語彙としてレキシコンに貯えられた形をそのまま産出することができる可能性が考えられ、自然発話データと実験データを比較した場合、自然発話データの誤用率のほうが実験データの誤用率よりも低くなると予測される。本研究の結果及び従来の知見から得られている自然発話データと実験データの乖離はこの予測と一致している。つまり、日本語において自然発話における誤用率が実験課題における誤用率に比して低かったのは、自然発話場面においては、語彙としてレキシコンに貯えられた形をそのまま産出するといった補助ストラテジーを用いることができるが、実験場面ではレキシコンの情報を有効に使用することができなかつたためであると推察される。

第2節 日本語を母語とする SLI 児の言語特徴の臨床的意義

第1節で述べたように、本研究の結果から、日本語を母語とする SLI 児の言語特徴として、1) 形態論的・統語論的側面の困難さをもつ、2) 形態論的・統語論的側面の中では格助詞の使用が最も困難である、3) 構造格の格助詞の使用のほうが内在格の格助詞の使用よりも困難である、4) 格助詞の使用の困難さは持続する、5) 自然発話における格助詞の誤用率は実験課題の誤用率に比して著しく低い、の5点を提案した。この言語特徴は臨床的に次のような応用可能性があると思われる。

まず、格助詞の誤用は日本語を母語とする SLI 児の臨床的指標として使用できる可能性があると考えられる。我が国においては、SLI 児の同定のための標準化された言語検査は少なくとも2015年の現時点では存在していない。今後、日本語を母語とする SLI 児を評価する標準的な言語検査の作成が必要であると思われるが、その際には、検査項目は上記の1)~4)を踏まえて作成される必要があると思われる。さらに、5)によれば、日本語では、自然発話における格助詞の誤用率は低いが、実験課題では高くなる。したがって、日本語を母語とする SLI 児の早期発見のためには、自然発話のみならず実験課題も用いる必要がある。なお、時制、アスペクト、受動文についても実験課題を用いると高い誤用率を示すことが報告されていることから (Fukuda & Fukuda, 1999; Ito et al., 2009, 2011; Ito et al., 2008)、実験課題を実施する際は、格助詞のみならず、時制、アスペクト、受動文などにも視点をあてる必要があると思われる。

第3節 縦断研究で対象とした2例の言語特徴の比較

本研究の縦断研究で対象とした SLI 児 2 例の言語特徴の共通点は以下のとおりである。A 児、B 児ともに形態論的・統語論的誤用が多く、その中では、格助詞の誤用が多かった（第 2 章第 1 節）。また構造格の格助詞の位置での誤用が内在格の格助詞の位置での誤用に比して多く、構造格の格助詞の位置での誤用では、他の構造格の格助詞への置換と内在格の格助詞への置換が同程度みられたという点と、格助詞の誤用の持続性が認められたという点で、A 児と B 児は類似していた（第 2 章第 2 節）。さらに、時制の誤用において、誤用率が著しく低く、過去形を非過去形へ置換する誤用が多い傾向にあるという点でも一致していた。アスペクトにおても、誤用率が低く、アスペクトの未使用と不必要な使用がみられるという点で類似していた。また、受動文についても、受動文の使用自体が少ないという点と受動文の誤用は 3 つのタイプに分けられるという点で、2 例は類似していた（第 2 章第 3 節）。

また、2 例の観察を通して気付いた共通点として、最も興味深い特徴は、自然発話中の誤用を訂正する様子が伺えないことであった。このことから、2 例の言語の問題が、言語知識そのものの問題に起因している可能性が考えられた。なお、上記のように、2 例の自然発話においては、形態論的・統語論的誤用が多くみられているが、音韻的側面の誤用と思われる発話も観察されている。例えば、A 児については、「ぬいぐるみみたいなバッジ」というべきところで「ぬいぐるみみたいなバッジ」というように、「ぬ」が落ちる誤用が 10 歳 6 カ月に観察されている。B 児についても、「いちごを乗っけて」というべきところで「いちごを乗けて」というような促音が落ちる誤用が 6 歳 10 カ月にみられている。また、語用論的側面の問題として、データ収集者が他の人（対象児の兄弟または保護者）と話しているにもかかわらず、話しかけてくるという様子が A 児、B 児ともにみられた。加齢とともにこの現象は減少する傾向にあったが、A 児 18 歳 8 カ月、B 児 15 歳 0 カ月のときにおいても観察された。

一方、2 例の言語特徴には、以下の相違点がみられた。A 児は形態論的・統語論的誤用

は語彙の誤用、談話の誤用、創造的誤用（形態論、統語論、語彙、談話のような明確な分類が困難な誤用）、の全ての項目に比して著しく多かったが、B児には、創造的誤用も多くみられ、形態論的・統語論的誤用と創造的誤用との間に有意な差が認められなかった（第2章第1節）。

また、筆者の観察によれば、A児の発話は、なかなかことばが出てこないといった印象を受けることが多く、言い直しや間が頻繁に観察された。例えば、A児19歳10カ月のときに「なんかね、最初はみんなやる気なくて、雑談とかだったから、ねえ、それでなんか、今日、なんか、こ、そ、このときは、なんかあれ」というような発話が観察されているように、「なんか」を頻繁に使用し、ことばを探しているような特徴が収集開始時より持続していた。このような特徴はLeonard (2014) が英語のSLI児の発話の特徴の一つとして挙げている喚語困難や石田 (2003) が報告したSLI児1例の特徴として挙げられている語想起の悪さに対応すると思われる。このような特徴から、A児の発話は非流暢であるという印象を受けた。しかし、B児の発話では、言い直しや間などはA児に比して少なく、流暢に話し、多弁であるという印象を受けた。

さらに、A児の発話には、語尾が弱く聞きとれない発話がみられ、この特徴も、収集開始時と比較すると減少していたが、収集終了時の20歳0カ月においても観察された。B児においては、語尾が弱く聞きとれない発話はA児に比して少ないと思われた。

一方、B児においては、簡易的な受動文の理解課題を実施した際、音声提示の成績のほうが文字提示の成績に比して高い傾向にあり、音声提示のほうが文字提示に比してスムーズに解答する様子がみられた。また、音読時の読み誤りも観察されている。これらのことから、B児は読みにも問題を持つ可能性がある。また、母親の報告によれば、B児が就学前に通っていた幼児教室の担当者から、ことばよりも数のほうが気になると指摘を受けたことがあるとのことだった。また、小学4年生の時点でも6+4という計算において指を使う様子が観察されたとB児の家庭教師が報告している。このことから、B児は計算にも問題を持っていた可能性がある。

従来から、SLIにはさまざまなタイプが混在していることが指摘されており、言語のどの側面に特に問題を示すのかに基づいてSLIをいくつかのサブタイプに分類する試みがなされてきた。SLIの統一的な類型化はされていないが、近年では、発現率の高い2つのサブタイプをより明確に区別する傾向にある(福田ら, 2007)。その2つのサブタイプとは、文法発達に顕著な障害を示すタイプと語用面の発達に顕著な問題を示すタイプであり、前者は文法的な特異的言語発達障害 (grammatical specific language impairment: G-SLI) または典型的な特異的言語発達障害 (typical specific language impairment: T-SLI)、後者は語用的言語障害 (pragmatic language impairment: PLI) と呼ばれている(福田ら, 2007)。また、SLI児のなかには読みに問題を示す子どもが存在することが従来からよく知られている。Catts, Fey, Tomblin, & Zhang (2002)の縦断研究では、Tomblin et al. (1997)の研究で言語障害をもつと診断された子ども達を対象として、小学2年生及び4年生の時点での言語能力、読みの能力、非言語性の認知能力について検討した。その結果、SLIと診断された子どもは読み障害をもつリスクが高いことが明らかになっている。

以上の知見を踏まえると、A児の自然発話には、形態論的・統語論的側面の誤用が多く、非流暢な発話や語尾が弱い発話が観察されており、計算など言語以外の問題が顕著ではないことから、A児は文法的側面に問題を示す典型的なSLIである可能性が示唆される。一方、B児の自然発話には、形態論的・統語論的誤用が多かったものの、創造的誤用も多くみられ、さらに、読みや計算にも問題を示していたことから、文法的側面以外の問題も併せ持っているタイプである可能性が考えられる。

文 献

- American Psychiatric Association. (2013) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). American Psychiatric Association, Washington, DC.
- Bedore, L. M. & Leonard, L. B. (2001) Grammatical morphology deficits in Spanish-speaking children with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 44, 905-924.
- Bedore, L. M. & Leonard, L. B. (2005) Verb inflections and noun phrase morphology in the spontaneous speech of Spanish-speaking children with specific language impairment. *Applied Psycholinguistics*, 26, 195-225.
- Bishop, D. V. M. (1994) Grammatical errors in specific language impairment: Competence or performance limitations? *Applied Psycholinguistics*, 15, 507-550.
- Bortolini, U., Caselli, M. C., Deevy, P., & Leonard, L. B. (2002) Specific language impairment in Italian: The first steps in the search for a clinical marker. *International Journal of Language & Communication Disorders*, 37, 77-93.
- Bortolini, U., Caselli, M. C., & Leonard, L. B. (1997) Grammatical deficits in Italian -speaking children with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 40, 809-820.
- Catts, H. W., Fey, M. E., Tomblin, J. B., & Zhang, X. (2002) A longitudinal investigation of reading outcomes in children with language impairments. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 45, 1142-1157.
- Clahsen, H. (1989) The grammatical characterization of developmental dysphasia. *Linguistics*, 27, 897-920.
- Clahsen, H. (1991) *Child language and developmental dysphasia: Linguistic studies of the acquisition of German*. John Benjamins Publishing, Amsterdam.
- Clahsen, H., Bartke, S., & Göllner, S. (1997) Formal features in impaired grammars: A comparison of English and German SLI children. *Journal of Neurolinguistics*, 10,

151-171.

Durkin, K. & Conti-Ramsden, G. (2007) Language, social behavior, and the quality of friendships in adolescents with and without a history of specific language impairment. *Child development*, 78, 1441-1457.

Eisenbeiss, S., Bartke, S., & Clahsen, H. (2005) Structural and lexical case in child German: Evidence from language-impaired and typically developing children. *Language Acquisition*, 13, 3-32.

Ellis Weismer, S., Plante, E., Jones, M., & Tomblin, J. B. (2005) A functional magnetic resonance imaging investigation of verbal working memory in adolescents with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 48, 405-425.

Fletcher, P., Leonard, L. B., Stokes, S. F., & Wong, A. M.-Y. (2005) The expression of aspect in Cantonese-speaking children with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 48, 621-634.

Friedmann, N. & Novogrodsky, R. (2004) The acquisition of relative clause comprehension in Hebrew: A study of SLI and normal development. *Journal of Child Language*, 31, 661-681.

福田真二 (2014) 特異的言語障害研究の現状と課題. 特殊教育学研究, 52, 317-322.

Fukuda, S. E. & Fukuda, S. (1999) Specific language impairment in Japanese: A linguistic investigation. *NUCB Journal of Language, Culture and Communication*, 1, 1-25.

Fukuda, S. & Fukuda, S. E. (2001) The acquisition of complex predicates in Japanese specifically language-impaired and normally developing children. *Brain and Language*, 77, 305-320.

Fukuda, S. E., Fukuda, S., & Ito, T. (2011) Atypical development of the passive

- construction in a Japanese child with specific language impairment. *Ars Linguistica*, 18, 152-163.
- Fukuda, S., Fukuda, S. E., & Ito, T. (2015) Grammatical deficits in Japanese children with specific language impairment. In M. Nakayama (Ed.), *Handbook of Japanese Psycholinguistics*, Walter de Gruyter, Boston, 81-116.
- 福田真二・Fukuda, S. E.・伊藤友彦・山口裕子 (2007) 日本語を母語とする特異的言語障害児における格の文法障害. *音声言語医学*, 48, 95-104.
- Fukui, N. & Nishigauchi, T. (1992) Head-movement and case-marking in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, 14, 1-35.
- Gathercole, S. E. & Baddeley, A. D. (1990) Phonological memory deficits in language disordered children: Is there a causal connection? *Journal of Memory and Language*, 29, 336-360.
- Gopnik, M. (1990) Feature blindness: A case study. *Language Acquisition*, 1, 139-164.
- Gopnik, M. (1994) Impairments of tense in a familial language disorder. *Journal of Neurolinguistics*, 8, 109-133.
- Gopnik, M. & Crago, M. B. (1991) Familial aggregation of a developmental language disorder. *Cognition*, 39, 1-50.
- Hansson, K. & Leonard, L. B. (2003) The use and productivity of verb morphology in specific language impairment: An examination of Swedish. *Linguistics*, 41, 351-379.
- Hansson, K. & Nettelbladt, U. (1995) Grammatical characteristics of Swedish children with SLI. *Journal of Speech and Hearing Research*, 38, 589-598.
- Hansson, K., Nettelbladt, U., & Leonard, L. B. (2000) Specific language impairment in Swedish: The status of verb morphology and word order. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 43, 848-864.
- Hugdahl, K., Gundersen, H., Brekke, C., Thomsen, T., Rimol, L. M., Ersland, L., &

- Niemi, J. (2004) fMRI brain activation in a Finnish family with specific language impairment compared with a normal control group. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 47, 162-172.
- 石田宏代 (2003) 特異的言語発達障害児の言語発達—臨床の立場から—. 音声言語医学, 44, 209-215.
- 伊藤克敏 (1990) こどものことば 習得と創造. 勁草書房.
- 伊藤友彦 (1982) 幼児の発話における非流暢性と言語習得との関係. 音声言語医学, 23, 211-220.
- 伊藤友彦 (1996) 聴覚障害をもつ幼児 2 名に生じた格助詞の誤用と構造格・内在格. 上田 功・砂川有里子・高見健一・野田尚史・蓮沼昭子 (編), 言語探究の領域—小泉保博士古稀記念論文集—. 大学書林, 43-51.
- Ito, T., Fukuda, S., & Fukuda, S. E. (2009) Differences between grammatical and lexical development in Japanese specific language impairment: A case study. *Poznań Studies in Contemporary Linguistics*, 45, 211-221.
- Ito, T., Fukuda, S., & Fukuda, S. E. (2011) Aspect in Japanese children with SLI. *Asia Pacific Journal of Speech, Language, and Hearing*, 14, 23-29.
- Ito, T., Fukuda, S., Fukuda, S. E., Otomo, K., Fujino, H., & Yamaguchi, Y. (2008) Characteristics of grammatical specific language impairment (G-SLI) in Japanese: A case study. *Studies in Languages*, 44, 53-59.
- Joanisse, M. F. & Seidenberg, M. S. (1998) Specific language impairment: A deficit in grammar or processing? *Trends in Cognitive Sciences*, 2, 240-247.
- Kail, R. (1994) A method for studying the generalized slowing hypothesis in children with specific language impairment. *Journal of Speech and Hearing Research*, 37, 418-421.
- 神尾昭雄 (1986) 失語症における言語学的側面—失文法の言語分析. 失語症研究, 6,

1131-1136.

Kunnari, S., Savinainen-Makkonen, T., Leonard, L. B., Mäkinen, L., Tolonen, A.-K., Luotonen, M., & Leinonen, E. (2011) Children with specific language impairment in Finnish: The use of tense and agreement inflections. *Journal of Child Language*, 38, 999-1027.

Leonard, L. B. (1998) *Children with specific language impairment*. The MIT Press, Cambridge, MA.

Leonard, L. B. (2014) *Children with specific language impairment*. (2nd ed.). The MIT Press, Cambridge, MA.

Leonard, L. B., Kunnari, S., Savinainen-Makkonen, T., Tolonen, A.-K., Mäkinen, L., Luotonen, M., & Leinonen, E. (2014) Noun case suffix use by children with specific language impairment: An examination of Finnish. *Applied Psycholinguistics*, 35, 833-854.

Leonard, L. B., Lukács, Á., & Kas, B. (2012) Tense and aspect in childhood language impairment: Contributions from Hungarian. *Applied Psycholinguistics*, 33, 305-328.

Leonard, L. B., McGregor, K. K., & Allen, G. D. (1992) Grammatical morphology and speech perception in children with specific language impairment. *Journal of Speech and Hearing Research*, 35, 1076-1085.

Leonard, L. B., Salameh, E.-K., & Hansson, K. (2001) Noun phrase morphology in Swedish-speaking children with specific language impairment. *Applied Psycholinguistics*, 22, 619-639.

Loeb, D. F. & Leonard, L. B. (1991) Subject case marking and verb morphology in normally developing and specifically language-impaired children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 34, 340-346.

Lukács, Á., Kas, B., & Leonard, L. B. (2013) Case marking in Hungarian children with

- specific language impairment. *First Language*, 33, 331-353.
- Lukács, Á., Leonard, L. B., & Kas, B. (2010) Use of noun morphology by children with language impairment: The case of Hungarian. *International Journal of Language & Communication Disorders*, 45, 145-161.
- Lukács, Á., Leonard, L. B., Kas, B., & Pléh, C. (2009) The use of tense and agreement by Hungarian-speaking children with language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 52, 98-117
- Marshall, C. R. & van der Lely, H. K. J. (2007) The impact phonological complexity on past tense inflection in children with Grammatical-SLI. *Advances in Speech-Language Pathology*, 9, 191-203.
- Marshall, C. R. & van der Lely, H. K. J. (2012) Irregular past tense forms in English: How data from children with specific language impairment contribute to models of morphology. *Morphology*, 22, 121-141.
- 益岡隆志 (1991) モダリティの文法. くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 基礎日本語文法—改訂版—. くろしお出版.
- 三原健一 (1994) 日本語の統語構造 生成文法理論とその応用. 松柏社.
- Norbury, C. F., Bishop, D. V. M., & Briscoe, J. (2001) Production of English finite verb morphology: A comparison of SLI and mild-moderate hearing impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 44, 165-178.
- Oetting, J. B. & Horohov, J. E. (1997) Past-tense marking by children with and without specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 40, 62-74.
- 大久保 愛 (1973) 幼児の文構造の発達—3歳～6歳児の場合—. 国立国語研究所報告 50, 秀英出版.
- 大久保 愛 (1977) 幼児のことばとおとな 新版. 三省堂.

- 大伴 潔 (2004) 特異的言語発達障害における発話の検討—語彙・統語に困難を示す 2 事例から—。特殊教育研究施設研究報告, 3, 1-9.
- Paradis, M. & Gopnik, M. (1997) Compensatory strategies in genetic dysphasia: Declarative memory. *Journal of Neurolinguistics*, 10, 173-185.
- Poll, G. H., Betz, S. K., & Miller, C. A. (2010) Identification of clinical markers of specific language impairment in adults. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 53, 414-429.
- Radford, A. & Ramos, E. (2001) Case, agreement and EPP: Evidence from an English-speaking child with SLI. *Essex Research Reports in Linguistics*, 36, 42-81.
- Records, N. L., Tomblin, J. B., & Freese, P. R. (1992) The quality of life of young adults with histories of specific language impairment. *American Journal of Speech-Language Pathology*, 1, 44-53.
- Rice, M. L., Hoffman, L., & Wexler, K. (2009) Judgments of omitted BE and DO in questions as extended finiteness clinical markers of specific language impairment (SLI) to 15 years: A study of growth and asymptote. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 52, 1417-1433.
- Rice, M. L. & Wexler, K. (1996) Toward tense as a clinical marker of specific language impairment in English-speaking children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 39, 1239-1257.
- Rice, M. L., Wexler, K., & Cleave, P. L. (1995) Specific language impairment as a period of extended optional infinitive. *Journal of Speech and Hearing Research*, 38, 850-863.
- Rice, M. L., Wexler, K., & Hershberger, S. (1998) Tense over time: The longitudinal course of tense acquisition in children with specific language impairment. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 41, 1412-1431.

- Rothweiler, M., Chilla, S., & Babur, E. (2010) Specific language impairment in Turkish: Evidence from case morphology in Turkish-German successive bilinguals. *Clinical Linguistics & Phonetics*, 24, 540-555.
- Schütze, C. T. & Wexler, K. (1996) Subject case licensing and English root infinitives. In A. Stringfellow, D. Cahana-Amitay, E. Hughes, & A. Zukowski (Eds.), *Proceedings of the 20th Annual Boston University Conference on Language Development*, Cascadilla Press, Somerville, MA, 670-681.
- St Clair, M. C., Pickles, A., Durkin, K., & Conti-Ramsden, G. (2011) A longitudinal study of behavioral, emotional and social difficulties in individuals with a history of specific language impairment (SLI). *Journal of Communication Disorders*, 44, 186-199.
- Tallal, P., Townsend, J., Curtiss, S., & Wulfeck, B. (1991) Phenotypic profiles of language-impaired children based on genetic/family history. *Brain and Language*, 41, 81-95.
- 田中裕美子 (2003) 特異的言語発達障害の言語学的分析—研究者の立場から—。音声言語医学, 44, 216-221.
- 田中裕美子・渡邊 純・白邦和子・Menn, L. (2001) 特異的言語障害幼児の言語特徴の解明への試み。聴能言語学研究, 18, 2-9.
- 寺村秀夫 (1982) 日本語のシンタクスと意味 I。くろしお出版。
- 寺村秀夫 (1984) 日本語のシンタクスと意味 II。くろしお出版。
- 寺尾 康 (1995) 文産出過程における統語部門研究の展望—助詞の発話データを資料として—。常葉学園短期大学紀要, 26, 245-255.
- Tomblin, J. B., Freese, P. R., & Records, N. L. (1992) Diagnosing specific language impairment in adults for the purpose of pedigree analysis. *Journal of Speech and Hearing Research*, 35, 832-843.

- Tomblin, J. B., O'Brien, M., Shriberg, L. D., Williams, C., Murray, J., Patil, S., Bjork, J., Anderson, S., & Ballard, K. (2009) Language features in a mother and daughter of a chromosome 7;13 translocation involving FOXP2. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 52, 1157-1174.
- Tomblin, J. B., Records, N. L., Buckwalter, P., Zhang, X., Smith, E., & O'Brien, M. (1997) Prevalence of specific language impairment in kindergarten children. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 40, 1245-1260.
- Trauner, D., Wulfeck, B., Tallal, P., & Hesselink, J. (2000) Neurological and MRI profiles of children with developmental language impairment. *Developmental Medicine & Child Neurology*, 42, 470-475.
- Ullman, M. T. & Pierpont, E. I. (2005) Specific language impairment is not specific to language: The procedural deficit hypothesis. *Cortex*, 41, 399-433.
- van der Lely, H. K. J. (1994) Canonical linking rules: Forward versus reverse linking in normally developing and specifically language-impaired children. *Cognition*, 51, 29-72.
- van der Lely, H. K. J. (1996) Specifically language impaired and normally developing children: Verbal passive vs. adjectival passive sentence interpretation. *Lingua*, 98, 243-272.
- Wexler, K. (1994) Optional infinitives, head movement and the economy of derivations. In D. Lightfoot & N. Hornstein (Eds.), *Verb movement*. Cambridge University Press, Cambridge, 305-350.
- Wexler, K. (2003) Lenneberg's dream: Learning, normal language development, and specific language impairment. In Y. Levy & J. Schaeffer (Eds.), *Language competence across populations: Toward a definition of specific language impairment*. Lawrence Erlbaum, Mahwah, NJ, 11-62.

Wexler, K., Schütze, C. T., & Rice, M. (1998) Subject case in children with SLI and unaffected controls: Evidence for the Agr/Tns omission model. *Language Acquisition*, 7, 317-344.

World Health Organizaton. (2005) *International statistical classification of diseases and related health problems* (10th ed.). World Health Organization, Geneva.

謝 辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々のご指導とご尽力を賜りました。伊藤友彦先生（東京学芸大学）には、学部、修士課程、博士課程を通して、主指導教員としてご指導いただきました。研究の進め方や論文の書き方だけではなく、研究で大切なことは何か、研究者としてどうあるべきかを、先生の姿を通して学ばせていただきました。また、未熟者の筆者をずっと支え続けていただきました。研究する喜びを知り、生きる道を見出すことができたのは、伊藤先生に出会えたからこそだと思います。心より感謝申し上げます。

北島善夫先生（千葉大学）、鈴木猛先生（東京学芸大学）には、副指導教員をお引き受けいただきました。研究の視点や方法、今後の課題など示唆に富むご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。澤隆史先生（東京学芸大学）、葉石光一先生（埼玉大学）にも、博士論文の審査会において有益なご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。濱田豊彦先生（東京学芸大学）には、機会あるごとにあたたかな励ましをいただきました。深く感謝いたします。

また、多くの方々のご協力を得て、本論文のデータを収集することができました。特に、縦断研究で対象とした2例のお子さんについては、長期間に渡ってご協力いただきました。この2例のお子さんとの出会いが、筆者がSLIを研究するきっかけでした。また、2例の保護者の方の想いが、筆者がSLI研究を続けていく動機づけとなっています。心より感謝申し上げます。また、横断研究では、都内のことばの教室及び通常学級にてデータを収集させていただきました。お忙しいにもかかわらず、いつもご丁寧に対応していただきました。ご協力いただきました、児童の皆さん、保護者の皆様、先生方に心より御礼申し上げます。

同じ研究室の先輩である松本幸代さん、迫野詩乃さん、高橋三郎さんには、多くの面で支えていただきました。数多くのご協力と励ましをいただきました。厚く御礼申し上げます。後輩の桂恵梨奈さん、野田智美さんにも、多くのご協力と応援をいただきました。深

く感謝いたします。修士課程で同期だった木村（安宅）涼香さんにも、様々な面で支えていただきました。同期として同じ研究室で学べたことが、博士課程の3年間の支えとなりました。心より感謝申し上げます。また、同じ院生室で仕事をさせていただいた濱田研究室の皆様にも、多くの面で支えていただきました。厚く御礼申し上げます。学部、修士課程、博士課程を通して、先輩方、後輩、同期の姿勢から多くのことを学ぶことができました。本当にありがとうございました。

最後に、多くの心配と苦勞をかけたにもかかわらず、応援し続けてくれた両親に心から感謝申し上げます。そして、一番近くで筆者を支え続けてくれた夫と娘にも心より感謝申し上げます。2人には、筆者のわがままを聞いてもらい、たくさんの我慢をさせました。それでも嫌と言わず、筆者を支えて続けてくれて、本当にありがとうございました。